
いつのまにやら伯爵様～マイペースな転生物語～

チョモランマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつのまにやら伯爵様〜マイペースな転生物語〜

【Nコード】

N5873W

【作者名】

チヨモランマ

【あらすじ】

身寄りのない僕は、赤信号を無視した暴走トラックにはねられ呆気なく死んだ……………ハズだった！目が覚めたら、見知らぬ美人な銀髪女性が微笑んでる。

あれ……………四大貴族の一角の三男坊。はてさて、流されやすい主人公は、この世界で何をなすのか。スローライフのはじまりです！

零話 享年31歳

「眩しい……………」

眩しいクラクションと共に、嫌に甲高いブレーキ音が耳に響いてくる。

人は死ぬ瞬間、一体何を考えるのか。印象に残った人生の軌跡が、一気に押し寄せる、走馬灯と呼ばれる現象に陥るらしいが、僕の場合は若干違うようだ。だって冷静だし、死ぬ間際なのに、人生とは何ぞやとか考えちゃってるし。

三流大学を卒業して、営業の仕事をしたすら頑張った。誠実なところをアピールするしか脳がなかったが、それがよかったのだろう。顧客から信頼を得て、奇跡の営業成績全国トップに。神様からの最後の手向けだったのかもしれないな。

ああ、話は変わるがよしゑさんにはお礼を言いたかった。今年で41歳。独身を貫くバリバリのキャリアウーマンで、鋼の男と名高い彼女。

身長175センチ。大きな鷹鼻を顔の中央に構える彼女の存在感は圧倒的だった。常に言葉の暴力と呼べる機関銃の銃口を、険しい眼

光から、真っ赤な口紅で塗りたくられた唇から、その朝青龍のようなふてぶてしい佇まいから向けるよしゑさん。

何で鋼の女じゃないのか、ずっと不思議だった。ある日、ふと気のいい先輩に聞いてみると、女と扱おうとするのはお前ぐらいだと笑われたっけ。

いや、よしゑさんはいいい人なのだ。間違いない！ これには同情してもらいたい、僕の顔は………非常に女の子に近い、らしい。二重の大きな瞳と、癖のないサラサラの髪は男が持っていていいものではないとよく女性陣に文句を言われた。背も165センチしかなかったのも原因の一つだ。170センチは欲しかった。今まで何度女っぽいとからかわれ、職場でセクシャルハラスメントを受けたことか！ お陰で人の視線には人一倍敏感になってしまった。死角に入ったら要注意だ！ だが、よしゑさんが守ってくれた！ 嫌なメタボまじつぐらのコレステロール係長を睨むあの目付き！ どんな人生の修羅場を潜り抜けたらあのような人を射殺す目が生まれるのだろう。職場の空気を見事に凍らせてくれた。

しかし、人生最後に思い浮かべるのがよしゑさんとは。かなり虚しい。物心つく前に両親と姉は交通事故で死に、親戚をたらい回しにされた僕。妙に達観して、彼女も親友と呼べる友も作らず怠惰に生きてきたツケかな。もしかしたら前世で人を殺したのかもしれない。

今日は休日、日が暮れるまでごろごろしていた。丁度切らした蚊

取り線香と急に食べたくなったガリガリ君を求めて、歩いて5分のコンビニへ。蚊がうるさく蒸し暑い夜だったのだ。目の前にある信号を渡れば直ぐに買えたはずだった。

赤信号をガン無視した暴走トラック。飲酒かな？ 全く……今更ブレーキ踏んでも遅いさ。恐らく時速100キロはゆうに超している。

はてさて、僕の人生……うーん、やばい。辞世の句も思い付かない。よしゑさんくらいしか走馬灯に出てこないし。はは。笑うしかない！ 何にも残らない人生だった！ あの世で両親と姉に何を話そうか？ 楽しみは、そのくらい。土下座せねばならないかもだけれど、ま、感動の再会と逝きますか！

僕の命は多分後一秒。避けようがない死に、最高潮にぐるぐる回る頭の中とは別に、身体は固まったまんまだ。しゃーない――

「折角だから、笑って逝くか！」

ドッカーン!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

一話 誕生！零歳児

――目が覚めたら、真っ白な天井が飛び込んできた。薄暗い部屋の中、柔らかい綿のような布でくるまれた僕。木製の四角い揺りかこの真ん中で寝転んでいる。

(……………ん……………)

天国かとも思ったが、なーんか違和感が。体が何だか自分の物じゃないみたい。重いし感覚が……………

「うわーん！！！！！！」

いったー、頭が痛い！孫悟空が頭を締め付けられたらこのくらい……………いやこの比じゃないか……………てか、仏のやることじゃないだろ！怒りの矛先は何故かそっちに！現状を把握したいのに、頭が痛くてそれどころじゃない。悲鳴も止まらないし、お腹もすいた！

もしかここは地獄なのでは?? もっとボランテアとかしとくんだった！

と考えてた所に、救いの手が伸びてきた。具体的には腰と頭に。そ

のまま静かに持ち上げられる。

「はい。大丈夫だよ。お母さんがついてるからね」

いつからそこにいたんだろうか。優しく抱えられた僕は、突然現れた人物にどきまぎしながらも、無意識にじっと見つめていた。

この女性の微笑みは……涙がでた。いや、泣いてるから当たり前だけど……もっと、心の奥の奥から、じわじわと暖かいものが溢れてくる。

少し垂れた目は彼女の優しさを伝え、すっと整った鼻孔に小さな唇が見える。

（まるで聖母のようだ……）純粹に、見たままの感想がこれだった。

髪は……銀色？ 眉も……瞳もだ……うわ、初めて黒髪黒目以外の人を間近で見た。とてもいい匂いがする。これが母親の匂いなのかな。

というか何を言ってるのか全然分からない！このミス聖母（仮）は可憐な声で唄いながら、僕の体を揺らしてくれる。

どうしよう………と考えるとまた頭痛が………のわつつ脳がオーバーヒートする！？　　またもや泣き叫ぶ僕。慌てるミス聖母。顔は笑みを浮かべたままだが、困ったように首を傾げてる。どうやら考え事をするとう頭が痛むらしい。

ま、なるようになるか………考えても仕方ないというかそれ以前に考えられないので、スルースキル発動。本能の赴くままに食っちゃ寝生活に突入する生まれたばかりの零歳児であつた。

二話 父と母

ようやくまともに考え事ができ、ほぼ完璧に言葉を理解したのが
ついこの頃。頼むから何があつたとか聞かないで欲しい。語るも赤
面、せめてトイレは自分でしたかつ……………いやいやいや、致し方
なし！

まずわかつたことは二つ。

どうやらここは地球じゃない！ 銀色の髪から、もしやルーマニア
とか北欧の地域かと色々考えたが、あり得ないことが判明した。だ
って月が二つあるし。興奮して月を小さな指で指しながらはしゃい
でたら、何だか暖かい笑みを母親から向けられた……………めちゃく
ちや恥ずかしかった。

もう一つは家族と僕のこと。

父親と母親、兄上2人に姉上が1人いる！ それにしても鏡を見た
ときは驚いた。

僕の髪は父親譲りの蒼髪。綺麗だなゝって他人事のように見つめて
しまった。顔はまあ……………父親と母親に感謝！ どっちかという

と父親に似てるらしい。瞳も蒼だし。どっちに似てるかで、よく言い争ってたけどね。両親どっちも譲らず。親バカ丸出したった。

母の名前はマリア・ラミレス。貴族の出で嫁いできたらしい。上品な雰囲気、優しさが滲み出てる。ただ怒ると怖い。非常に怖い。兄上たちが僕にイタズラしたときとか、凄い怖かった！あの微笑みは一生忘れまい。だって目が笑ってないもの。その場で兄上たちを正座させ、ずっとお説教を食らわしていた。だが、少し体が弱いのが気になる。長生きしてもらいたいな。

父親はアレン・ラミレス。実はもつと長いんだけど、そこは面倒だからいいや。蒼き獅子の異名を取る父は、凄い美男子だ。短く綺麗な蒼髪に、涼しげな二重の瞳。体軀はとてもがっしりしていて、二の腕とか凄い堅い。ぶら下がると面白かった。歴戦の猛者みたいだ。何かあると、すぐに大きな声で笑うのが好きだな。悪戯坊主みたいで。ちよつと上から目線だけど。こんな親友が欲しかった。

兄上たちとは年が結構離れてるので、あまり構ってもらえなかった。まあ望んでなかったが。からかわれたり、イタズラされた記憶しかない。姉上がもっぱら僕と遊んでくれた。

名前はターニャ。母さん譲りの銀髪の天真爛漫少女だ。少々吊り目で、気が強そうな印象を受けるのが特徴かな。3つ上の逞しい姉だ。ただ残念なことに、中身は父親そっくりで、よく剣術の真似事してる。

「お前は私が守ってやるからな。何かあったら私に言うんだぞ！」

何とも力強い騎士様のようなことをよく言われる。父上に憧れているようだ。今のそんなに僕は弱そうかな？ 兄上たちにイタズラされる僕を助けるために、どこから持ってきたのか木刀で二人をボコボコにした光景は未だに瞼に焼き付いている。

やー……………あれにはドン引きしたな。別にちよつと髪引つ張られるくらい良かったのに。僕は泣かなかったぞ！

三話 出会い

父母に見守られ、兄上たちにはちよいちよいイタズラされ、姉上と遊び回る。

やばい。結構楽しい。とにかく毎日が新鮮だ。ああ、上る朝日がなんと美しきことが。

暖かな陽光が部屋中を照らす。1日のスタートだ。僕はいつも母と寝ている。姉上が何故かよく布団にもぐ込んで僕を抱き締めてくるのに、ようやく慣れた今日この頃。大抵目覚めると母はもう活動中だ。僕は昼まで爆睡することが多いからな。早く大きくなりたい。

彼女は光の聖母と呼ばれ、此の世界でも珍しい治癒魔法が使えるらしく、よく領内を回り怪我人の治癒に当たっている。その為、凄く人気だ。正直、魔法にめちやくちや興味がある！姉上が母上のことを誇らしげに話すのには些か飽きて辟易するが、いつか習ってみたいものだ。

とりあえず、最近の僕の目標。それは立つて歩くこと！未だにハイハイなのは結構恥ずかしい。今日は姉上も来ないし、チャレンジしてみようかな。

今日中に歩くことに決め、二度寝した重いからだをゆっくり起こす。お昼寝から覚醒した僕の体力ゲージはMAXだ。今なら屋敷をハイハイで一周できる。気がする。

ふと、視線を感じ右上をちらつとみると……………精霊？がいた、え？？ちょ？？精霊？じゃなくて幽霊？此の世界の神様？薄く輝く翠色の髪を腰まで伸ばし、窓辺に浮かびながらこつちを見つめる見た目20代の女性の姿があった。何だか生氣を感じない。造られた……………ギリシャの彫刻から感じる造形美とでも言おうか。顔の輪郭がはつきりした目が覚めるような美女が……………浮いていた。色んな意味で。

5分が経過しただろうか、とりあえず手を振ってみた。無視された。明らかに無視された。心なしか笑われた気がする。

ほー。僕の何かがメラメラと燃え始めた。触れられるか分からないけど、捕まえてみよう。慎重に揺りかごから降りると、僕はクラウチングスタートの体勢に。光ちゃん（仮）は、僕の意図を見抜いたようだ。ジッとこちらを見ている。

我がハイハイ生活の成果！とくと見よ！変なテンションに達した僕は、全力で光ちゃん（決）にアタックしようとかかっていく。

それを冷めた目で見つめてたと思いきや、スッと部屋の中央にあるダブルベットに移動した！

不味い。彼処にはまだ一人では登れない……………だってそもそも立てないし。無性に悔しくて、うんうん唸っていると、調子に乗った光ちゃんが満面の笑みで僕を身ぶりで呼んでいる。

笑えるのかよ！脳内で突っ込みつつも、うろちよるとベットの周りをうろろろする僕。まるで路頭に迷った犬みたいだ。唸ってるし。

さらに調子に乗った光ちゃんはベットをびよんぴよんを跳び跳ねる。間違っても大人の女性がすることではない。

平和主義の僕だが、これにはムカツときた。今に見てるよと、ベットにしがみつき、プルプル震える足に活をいれ、立ち上がった。

よし、ここまでくれば後は足を引っ掻けて、体重移動を上手くやれば登れるはず！しかし、右足を引っ掛けたところで、光ちゃんはまたもや移動しやがった！

開いていたドアからああゝ暇潰しできたと言わんばかりに、出ていこうとする。それはないだろ光ちゃん！うーあゝと、まだ舌足らずな口で喋りつつ、立ったまま歩いてみる。自転車みたいなもんか、コツはすぐに掴めた。

ふはは！逃れられると思うてか！両手を前にバランスをとりつつ、

急いで跡を追ったところで、父上と母上が登場。

いや……大感激。二人の目には、こっちに舌足らずな言葉で話しながらよちよち歩くようになったばかりの末っ子の赤ん坊の姿は、さぞ可愛く写ったことだろう。

抱き締められ、揉みくちやにされた。次こそは光ちゃんを捕まえて見せると誓いつつ、二人の喜ぶ姿が嬉しくて、自然と笑顔になった。

四話 四歳になった！打倒光ちゃん！

あつという間に月日が流れていった。僕は立つこと、歩くことを覚え、何故か一人でいるときに限って現れる光ちゃんとの追いかけっこに熱中していた。お陰でこの屋敷で僕の知らないところはない。裏門の門番、コウくんとも知り合いになったし、広い庭に生えたラスムの樹にも落書きしたり、庭師さんに色々な花の名前を聞いたり、充実した毎日だ。

改めて思うが、この屋敷は非常に広い。大理石などの石で造られた二階建ての屋敷は、歴史を感じさせる。外出用の門までは結構歩かなくちゃいけないし、門番も絶えず立っている。一人で抜け出すのは難しいかも。

夏からターニヤ姐がラスルコフ学園とかいう名門貴族が入る学園に通い始めたので、自然と遊び相手は光ちゃんにチェンジしたのだ。学園の寮に入ってしまったので、長期の休みか年末年始しか会えなくなってしまうのは寂しいな。

本人は相当嫌がっていた。「クリームと一緒にいいっ！」と僕の腕を1日中離さなかった。途中から腕の感覚がなくなったのを覚えている……………母上やメイドさんの粘り強い説得と、僕と交わした約束によってようやく納得してくれた。向こうにいる兄上たちと仲良くしてもらいたいな。未だには二人を嫌ってる。間違はなくラミレス家の子供の中で、最強の武力を誇るターニヤ姐の学園生活と将来は一体どうなるのか。僕にとっても他人事じゃすませられない。

ちなみに、この国の名前はギルバート王国といい、王と貴族が政、司法、行政の全てを担っている。統治は地域ごとに貴族が行い、領地内での権力は強い。だが、厳密な王法があり、もし違反すれば首都に君臨する王が裁く。先の隣国との戦争の爪痕がまだ残っているが、今のところ内乱もなく平和が保たれているようだ。

父上と母上は権力に興味がないらしい。首都で社交パーティーを開き人脈の拡大と権力のポストを狙う他の貴族と違って、領地の統治に従事している。

王に呼び出されるか、用事がなければ滅多なことでは領地を留守にはしない。たまに領地周辺に出没する魔物の討伐を父上が行っているが、それも貴族の義務なのだとか。カッコイイぞ父上！

ある日、魔物の討伐が終わったときに、

「この地を守ることが、王に忠義を尽くすことになり、この国の平和に繋がるんだ。クリムも誰を守るカッコイイ男になるんだぞ。おっと、俺譲りでもうカッコイイか！はっはっは！」

最後に台無しにしゃがった感があるけど、騎士の鏡みたいな男だな。こんなカッコイイ人は前世ではあったことないや。僕は素直に誇らかった。

話は変わるが、いまいち光ちゃんのキャラが掴めない。クールで寡黙な大人しいキャラかと思いきや、挑発じみたことしてくるし。それに乗る僕も僕だが。ひたすら追いかけて目を離すとすぐどこかに姿を消すので、世話役のメイドさんは大変らしい。

母上に注意を受けたが、父上が庇ってくれた。男は元気があってななぼだつてさ。光ちゃんに勝つまで、やめる気はさらさらない。

未だに捕まえられないが………追いかけて負けて疲れたら、屋敷の書庫から勝手に持ってきた本をひたすら読むことにしている。絵本はそろそろ飽きてきた………明日には36だし。文字は英語に近いかったが、右手には辞書を装備しているので何となく読める。お気に入りなのは、魔法理論の構築者「クルズ大魔導士の一生」と歴史書「ギルバート史」とラミレス家当主の功績を讃えた「ギルバートの英雄」かな。自伝はどの世界でも面白いらしい。少々眉唾なことも書いてあるが。数多の敵軍をたった一騎で粉碎できるものなのか？　いつか見てみたいものだ。

一応、4歳児が読むのは不自然な本ばかりなので、カモフラージュに大量の絵本を横に置き、扉から死角になり見えないように読んでいる。寝っ転がって本を読みながら、将来のことも考えてみた。僕の生まれた家は幸運なことに名家だ。建国を支えた4大貴族の一

角。軍事に名高い伯爵家。立派な貴族の一員で、父上は蒼き獅子の異名を持つ猛者だ。

何でも僕が生まれる前、隣国との大戦で大活躍したらしい。そこでついたのが蒼き獅子。百獣の王が二つ名にあるとか、自分のことのように誇らしい。

だが、戦争は正直嫌だ。争い事は好きじゃないし。3男坊の僕としては、家長になるわけでもないの、この世界を気ままに放浪しよるかと思ってる。だってまだ本で読んだんだけど、領地の外には魔物がいるんだよ！ドラゴンも！エルフと呼ばれる亜人たちも！

ファンタジー満載な世界に折角生まれたのだ。世界を見てみたいと思うのは当然だ。

前世の知識は……………正直微妙。使うにはどうも半端すぎる。違う価値観と基準を持った、一風変わったアイデアを持つ人物にしかない自信がない。

格闘技とかやっていたわけじゃないし……………世の中、そんな上手くないかないよな……………

目指すは冒険者だな。うん。んでもって先ずは打倒光ちゃん。見事に繋がらないけど。

その後もひたすら追いかけてをしていたのだが………言っとくが、僕に遊ぶ余裕は全くない。必死に追いかけたが………あれは反則じゃね？ 消えるんだよ！ いつもいつもあと一歩のところで………そういえば、光ちゃんはどういう存在なんだろう。

初心に帰って、敵を知ることからと思い母上にアドバイスを求めた。

「母さん。光ちゃんのことなんだけどさ。」

「光ちゃん？」

おっとしまった。これじゃ伝わらないか。姿形含めて出会ったときから今までのことを話してみた。

そしたら、立って歩いたとき以上に驚いた様だ。呆然と僕を見つめた後、突然ハグしてきた。うわ………柔らかい。今更だが照れてしまう。意味不明な行動に首を傾げ戸惑う僕を放って、ぎゅうっと抱き締めたままの母上。

「凄いわ〜。さすが私のクリーム！！ 天才よ〜。」

本邦初公開！ 僕の名前は鈴木空也改めクリーム・ラミレス。まあ、それはいいんだけど。はて？ 天才とは？

五話 後継者？

光ちゃん改め、本当の名はクリファ・ロウエリア・アスタリスク。何でも精霊の中でも凄い高位に位置するらしく、母上にしか見えな
いし存在も感じられない。知性もち、自由気ままなその精霊は、
今まで母上以外にその姿を見せなかったらしい。

精霊とは、ま、八百万の神々みたいなイメージでいいと思う。高位
の精霊は神と同一視され、信仰の対象になっているものもあるら
しい。一般的に自然界に存在する魂だけの存在で、姿形も様々だ。光
ちゃんのように人形で自由に移動する精霊は稀なんだって。

へへ……つまりは精霊界のひねくれ者ってことかな。納得納得。鋭
い視線を後頭部に感じつつ、「光ちゃんは意地悪なんだ」と今まで
の鬱憤をここではらさん！ と思って愚痴っておいた。間違いなく
光ちゃんも聞いているハズだし。あれ……………視線が殺気を帯始めた
ぞ？？ 嫌な汗がじわつと背中を湿らせた。

「ふふ、それだけ気に入られてるのよ。遊んでもらえて良かったわ
ね。」

頭をなでなでされる。耳が赤くなっているのが分かる。褒められ慣
れてないのだ。どうしても顔がにやけてしまう。

「けど、何で母さんと僕にしか見えないの？」

「ん。ちょっと難しいけど、クリファが気に入った魂の持ち主じゃないとあの子光の中に隠れちゃうの。それに、これは生まれ持ったものだから……アレンは例え目の前にいたとしても、クリファに全く気づけないの。他の精霊さんもよ。」

つまり靈感が全くなないと、心靈スポットにいても幽霊を感じられないし、見ることもできないようなもんな。そういえば、此の世界の幽霊はいるんだろうか？ 前世は縁がなかったからな。ちょっとみてみたい気もする。

どうやら、僕には靈感、もとい精霊使いの才能があるらしい。何故光ちゃんに気に入られたのかは分からないが、多分暇潰しに遊ばれてるだけだと思うので、あんまり嬉しくない。

しかし、光ちゃんはあれか。属性は光なのかな？ 光の中に隠れるって……無理じゃん。やる気が空中ダイビング並みに急降下した。脱力感が半端ない！ あのにやけ顔に、なんとかしてフライングチョップを決められないものか。悲しいことに今までの努力は無駄だったのか……

落ち込む僕に気づくことなく、母上は興奮しまくっている。きゃーきゃー嬉しそうに再度抱き締め……たまま回り始めた。一体ど

うしたんだろう。そろそろギブアップしたい……………脳がシエイクされてる。強めのタップを母上の肩に何度もしてようやく止めてもらえた。母上も気持ち悪そうだ。体弱いんだから、自重して欲しい。

「クリームは〴〵私の〴〵後継者〴〵」

変な歌唄い始めたぞ。母上が壊れたようだ……………若干引いている僕。どうしよう……………

「明日から毎日お勉強しましょうね!」

何の勉強? というか明日は僕の誕生日では!? 何だか母上の顔を見ると忘れてる気がする。早速準備しなくちゃと、母上はいそいそと消えていった。

もしもお勉強テキストが誕生日プレゼントだったらグレてやろうと決意した器の小さい4歳児がそこにいた。というか僕だった。

五話 後継者？（後書き）

読んでいただきありがとうございます！

六話 波乱の誕生日

今日はラスルコフ学園はお休みだ。週に二回休みがあるのだが、丁度僕の誕生日と合わさったので、昨日半日かけて兄上たちと姉上が駆けつけてくれた。久々の再会に悦びつつ、お昼から屋敷を使った規模の大きな誕生日パーティーとなった。

ラミレス家って凄いんだ……………今更ながら実感する僕。分家筋だけで結構な人数が。他の貴族の面々も。この世界の料理は僕にとつて当たり外れが大きい。まあ基本的には肉と果実は外れはないので、今日はご馳走だ！ よく見ると僕の好物がたくさん並んでる！ よ！ 仕事人の料理長に金一封！

興奮する僕の横には、ターニヤ姉が白い可憐なドレスを着て嬉しそうに微笑んでる。昨日の夜からずっとこんな調子だ。母上も呆れるくらい、ずっと僕の周りを離れない。夜は一緒に寝ることになった。流石にお風呂は遠慮した。というか僕が逃げた。僕の危機察知センサーに何かが反応したのだ……………

最近は少しずつ女の子らしくなってきた。髪も肩まで伸ばし、ずっと笑みを絶やさない彼女は魅力的なのだろう。さっきから周りの少年たちの視線が張り付いていた。間違いなく母上似の美人さんになるからな。話しかけたくてうずうずしてるみたいだ。

思春期の少年を助けてあげよう！ と人助けをしようと考えた僕は

と、軽い気持ちで姉上に話しかける。

「お姉ちゃん。あの男の人、ずっとお姉ちゃんを見てるよ。ちょっと話しかけてあげたら？」

「私はあんなゴミクズに微塵も興味がないからいいわ。それより今日は私の傍を離れちゃダメよ。明日から会えなくなるんだもん……はぁ……拐っちゃおうかな」

一気に何かが重くなった！ 誰を?? 何で?? 何処へ?? 余計なことをしたのかもしれない。ターニヤ姉が冗談を言っているとは思えなかったらだ。見ると、彼女の目は本気だった。本気で悩んでいた。

「でも……話したら面白いかもよ。ちょっと僕、あっちに行ってるからさ」

君子危うきに近寄らず、との頼もしい教訓の通りに、僕は戦線離脱を試みた。

「だゝめ。拐われちゃうよ？お姉ちゃんと一緒にいるの。何だか他の女がクリムを狙ってるみたいだし、私がいれば安全だから」

手を握られた。まったく感知できず、いつの間にか……これはどうやら……逃げられない！ んでもってツッコミきれない！ 僕はなに狙われているんだろうか………思考が停止すること約30秒。

「初めまして、ミス・ターニャ。私はロイルと申しまして、本日………」

勇敢なチャレンジャーが来た！ 僕より頭二つ分高い、くるくるした金髪の………えっと、狐みたいな顔の人がやって来た。鼻が高く、長い切れ目が狐の変化したやつみたい。口元も笑っているんだけど、何か嫌な笑みだな。下心ありそうな感じ。青を基調にした王国の軍服を着ている。どっかの士官候補生かな？ 年はまだ12、3歳ぐらいだろうか。

「……………」

「……………」

気まずい。何故かすぐ近くにいる僕にもこの空気は痛い。ターニャが一瞥しただけで、明後日の方を向いて見向きもしないからだ。しかもちよつと不機嫌そう。狐さんも戸惑っている。誰か………そうだ、兄上は………女の子と談笑中。ご機嫌だ。助けてはもらえないだろうな……………」

「お主が、クリームかの？」

キョロキョロしていたら、後ろから声をかけられた。振り向くと、そこには上目遣いにこちらを見上げる、どこかのお嬢様がいた。

悪い予感しかないのは何故だろう？

七話 お姫様

瞳は好奇心からか爛漫と輝き、首を少し右に傾けながら話しかけてくるどこかのお嬢様。

白い光るような艶のある髪を後ろに縛り、利発そうな顔をしたこの子に、紫の大人びた感じのドレスは………まだ早いなど、36歳を迎えた僕は思った。甥っ子がいたらこの子くらいか。背もほとんど同じくらいだし、どうみても同じ年か、ちょっと下だ。

この国は美人が多いのか。よしゑのような鼻を持った女性を僕はまだ見ていない。長い睫毛に、ふつくらとした白い頬。鼻が可愛らしくちゃんと乗っている印象を受ける。絵画の中の美少女って感じ。

ていうか、お主って？ 気品あるこの子の雰囲気も妙に気になる。

どこかの帝国のお姫様かな？

「そうだけど、君は？」思ったままを口にする僕。白い頬をつつすら赤く染め、嬉しそうに少女は話始めた。

「やはりか！お主の噂はきいとなったからな。蒼い髪にその瞳。うむ、いい顔じゃの。そう思わぬかアイリ！」

「はい。そのようです」

うお！ 気づかんかった。お嬢様の左後ろに、若い女性が……………白銀の鎧を着けて立っていた。いい加減、人を驚かすのは辞めて欲しい。そろそろ僕のキャパがブレイクしそうだ。灰がかった銀色の髪。周りを見渡す鋭い眼光は、狼のようだ。犬の耳を着けたら似合いそう……………いやいや僕は何てバカなことを。白一色の鞆のレイピアを腰につけ、お嬢様と一緒にこっちを見てる。

というか、なんで鎧を着てるんだ。5歳児の誕生日パーティーに鎧っておかしくないか……………いったい何しにきたんじゃっお主ら！ っ突っ込んだら負けだろうか……………

「妾はローラ・フォン・ライルボルト・ギルバートと言っ。よろしくの！」

「僕はクリム・アース・ギルメリア・ラミレス。こちらこそ！」

互いに握手を交わした。営業マンだった頃の癖というか、条件反射で。

「うむうむ。ところでお主よ。将来私の騎士にならんか？」

「はい？」

「ローラ様。それは些か……………今日は挨拶だけの筈では」

「嫌じゃ！ 見よアイリ！ この溢れんばかりの才気を。必ずや蒼き獅子の名に負けぬ男になるじやろう。あんなハゲの息子とは大違いじゃ。欲しい！」

「そう言われましても……………ああ、王にも内密でこちらに来たのです。そろそろ帰りませんと」

「お主の主人は妾じゃ！ 問題あるまい」

「それはそうですが……………」

おお、何だか騎士さんが頭を垂れて困ってる。僕が一番困ってるんだけどね！ あんまり聞きたくない不穏なワードが乱立してるんだけど。

「姫様ではございませんか！？ どうしてこちらへ？」

やった！ 父上が来てくれた！ さっきからターニヤ姐と狐さんもこっちを不思議そうに見てるし、何とかして欲しかった！ って……今父上なんてった？ 会場の人々もざわざわと混乱している。

「久しいな。アレン。父が此方に顔を見せんから拗ねておったぞ」

「いえそれは……それよりどうして此方へ？」

父上が焦るなんて珍しいな。片膝をつき、姫と目線を合わせている。

「お主自慢の秘蔵つ子を見にきた。どうせ城には連れてこんじゃろうしの。お主譲りの見事な蒼髪じゃ」

「は、光栄であります」

「騎士になるのが待ち遠しい。……ふむ、不本意だがあまりアイリを困らせるのも悪い。妾はもう帰るが、近いうちに顔をみせよ。父も喜ぶじゃろ。」

「は！ ギルバート王にも宜しくお伝えください」

そういえば、母上に聞いたことがある……………才女と名高い王国の第二皇女。

神の祝福を受け、王に溺愛されている彼女は滅多に人前には出ないが、その美しさは他を圧倒するとか。僅か5歳にしてラスルコフ大学院の入学試験をパスしたスーパー少女。

「それじゃあの、クリム。また会おう」

颯爽と去っていく姫に、無言で従う白銀の騎士。その後ろ姿を、僕は呆然と見送ることしか出来なかった。

八話 魔法

「クリーム…………騎士って？ 怒らないからお姉ちゃんに教えて。」

怖かった。軽くホラーだよ。後ろから僕の肩をガシツと掴み、耳元に話しかけないでくれ！ 逃げようにも暴走トラックを前にした僕のように体が…………あれ？？ これ、殺される？

ターニャ姐には、震えながら1時間かけて己の潔白を証明しました。誕生日の主役なのに！ 本当に散々だった…………狐さんも青い顔して逃げてったよ…………

次の日、母上から緑色の表紙の古びた本をもらった。どうやら、魔道書と呼ばれるものらしい。昨日はターニャ姐がいたからな。今日から勉強開始だ！ 母上は治癒魔道士として、人々の怪我や病を治したりしているのだが、そろそろ自分の後継者、弟子が欲しかったらしい。知識や技術を伝授し後世に残す。大切な使命とのこと。

僕は将来、冒険者だからな。治癒魔法は覚えなくて損はないだろう。騎士になる気は毛頭ない。姫様には悪いけどね。諦めて欲しい。

早速、午前中に魔道書片手に個人レッスン。基本的に治癒魔法は、体の自然治癒力を上げ、大気的光子、通称ムーンとか神の雫とかいう、ミクロレベルのエネルギーを操り患部を治す。怪我の種類によ

って、扱う魔法も知識も全然違う。並行して文字のお勉強も開始だ！ 順序がおかしくね？ とか思ったが、まあいいや。

いつも座敷わらしのように、気づいたらいる光ちゃんと共に、3人でみつちりお勉強したら、昼食を挟んで領内を母上と回る。ほとんど母上の処置と呪文を見たり聞いたりしてるだけだけどね。

魔法って凄いな……………日本にも言霊、声には何かしらの力があるって言われてたけど、それに大気に漂うムーンと光ちゃんの力が加わると、曲がって骨折した腕がでも直ぐに治るんだもんな。

言霊に力を加えたもの……………僕に取って、これが魔法の定義だ。

大々方方には屋敷に戻る。いや……………本当に母上は凄いや。素直に尊敬する。まさにこの世界版ナイチンゲールだ。

そうそう、実は父上にも誕生日プレゼントを貰った。武骨な鉄製の短剣だ。母上はいい顔してなかったが、僕は嬉しかった。素振りでもしてみよっかな。

剣道の授業を思い出す。両手で剣を正眼に構え、一步踏み出すと同時に、気合いをいれて降り下ろした。

うーん、まだまだだな。薩摩隼人の示現流みたいに、ひたすら上段の降り下ろしを繰り返す。猿叫んでどうやるかな。とりあえず、叫んどく。

息を静かに、体の隅々まで巡らせて……………」は！！！」と、降り下ろしてみた。

今のはいい感じ。何だか楽しくなって、日が落ちるまで繰り返した。いい汗かいたぜ！

そのままお風呂に入って食事を、今日も肉！！ やったね。夜はぐっすり眠った。

こんな調子で一週間が経った。いつものように、素振りを終えてお屋敷に入ろうとしたら、いつ帰ってきたのか、珍しく早く帰宅していた父上がじっとこっちを見ていた。

「おいクリム！ お前は全く……………」さすが俺の息子だ！ 5歳の剣じゃないな、はっはっは。剣の才はターニャだけにかと思っただが、お前もか！ はははっ、さすがは姫だな。見る目がある！」

まあ、一応36だし……………」何だかデジャブだ。母上のとくとパターンというか、何か褒められかたが似てる。父上につられて笑う僕ということは……………」

「明日から早速剣の稽古だ！」

似たもの夫婦め！

九話 温もり

「クリームは治癒魔道士になるのです！ クリファを見ることなんて、宮廷魔道士でも無理だったんですよ！ 騎士なんて、立派にムウリが勤めますから大丈夫です！」

大丈夫とは？ はてなと僕は思った。ちなみに、ムウリとは長男、次男はスメルと言う。

「確かに捨てがたいが、クリームには剣の才がある。あのローラ姫が認めたのだ！ 将来騎士に欲しいとまで………腐らせるにはあまりに惜しい！ 今すぐにでも騎士と混じって稽古させるべきだ！」

それは嫌だな。痛そうだし。

「いーえ。こればかりはアレンの頼みでも聞けません！ ダメです」

「わからず屋！」

「どつちがですか！」

両親の喧嘩は初めて見た。しかもどんどんヒートアップ。子供か？

僕は冒険者になりたいんだけどな……………言い出しにくい。期待してくれるのは嬉しいけど、何だか悲しくなってくる。喧嘩は辞めて欲しい。

「クリームはどっちになりたい？」

母上がにこやかに話しかけてくる。けど目が笑ってませんよ？ クリムは分かってるよね、みたいな……………テンパる僕。

「えーっと……………両方……………かな……………」

ああ、弱きことかな、僕の意味。しゃがんで僕をじっと見つめる母上に、腕を組ながら真剣な眼差しを向ける父上。空気を読むしかないじゃないか！

「……………そうね」

「……………そうだな」

お、僕の気持ち伝わったか？ 本当はどっちも……………

「さすがクリーム！その手があったわ」

「さすがクリーム！そうこなくちな！ははは」

「ははははは」乾いた笑いで誤魔化した。やばい、涙でそう。天然夫婦には通じなかったか。

その後、すぐさま仲良くなった両親を尻目に、気晴らしに庭に出た。裏門から屋敷を抜け出してみようかな……少しやさぐれぎみの僕。日本と違って街灯もなにもないので真っ暗だ。屋敷から漏れるほのかな明かりが辺りを照らす。夜風が気持ちいい。ほのかな花の匂いが運ばれてくる。花なんて、前世じゃ愛でようと思わなかったっけ。人生を楽しむ余裕ができてきた証拠かもしれない。体育座りしながらいやされる僕。ああ、本当に気持ちいい。

「クリーム様。いかがなさいましたか？」

メイドさんが話しかけてきた。確か先週、新しく入ってきた人だ。まだ20にも満たない茶髪の少女。顔立ちもよくしつかり者。評判も確かい。コウくんがしきりに褒めてたっけ……胸が大きいとか、隣のひと。ま、コウくんは独身だからな。仕方ない。確か名前はリス。

「ちょっと……夜風に。」自分の世界に浸っていたのだ。なんだか恥ずかしかった。

「風邪を引いてしまいます。さ、戻りましょう?。」

手を差しのべてくれる。握ると温かった。ぬくもり……………か。ちよつと確かめてみたい。

「ねえ。」

「はい。どうしました?。」

「ぎゅってしていい?。」

リリスは一瞬呆然としたみたいだが、頬を微かに染め、いいですよと自分から僕を抱き締めてくれた。

「リリスは暖かいな……………」

心臓の音が聞こえてくる。

世界へ、僕は一人で旅立とうと思っていたが、無理かもしれない。前世ではあり得なかった家族が、温もりがここにはあるのだ。こんなに毎日が楽しくて、すぐに過ぎるのはこのためか。父上に母上、

兄上たちにターニヤ姐。

「あゝリリスズルいわ。クリームを抱き締めるのは、母の特権なのよ」

ガバツと、母上が突進してきた。

「ははっじゃあ俺の特権でもあるな！」

と、交じろうとする父上に、

「あなたはダメですよ」

「旦那様は遠慮してください。」

手厳しい女性たち。皆で一緒になって笑った。心の中で心配になって探しに来てくれた両親に感謝しながら。

心安らかな1日になった。

十話 めでたきかな

「クリーム様。朝ですよ」

うむ。淡々とした口調だが、僕は知っている。リリスは優しい。一言一言が、安らかに心に響いてくる。と言っわけで二度寝開始。

「クリーム様……………」

したいけど、リリスが悲しそうにすると良心がきりきり痛むので、起きることにした。

「やぁリリス！おはよう」僕は布団をはね除け、朝日に目を細める。

「おはようございます。クリーム様」丁寧に頭をさげるリリス。

表情は満面の笑みだ。手玉に取られてるのかも。まあ僕は単純だから仕方がない。あの晩、両親に頼んでリリスを僕の専属メイドにしてもらった。今までは日によって違う人が代わる代わる来てくれたが、これからはリリスに頼む。

な〜んか母上と一緒にいるかのようで、安心する。この温もりが好きだな。リリスが平民出だからかな？ 理由はよく分からない。着替えを手伝って貰い、今日は治癒魔法の勉強と剣の稽古だ！ 5歳児だということを、両親は覚えてるのか？ まあ楽しいからいいけどさ。

朝から無駄に張り切っていたが、父上が仕事とか！ そのうち騎士団の誰かを寄越すから、暫くは治癒魔法オンリーだつて。出鼻を折られたが仕方ない。母上！ いざ！ と思って部屋を訪ねたら、メイドさんがたくさん集まって騒いでいた。リリスもいる。慌ててるみたいだ。

「どうしたの？」

「あ、クリム様！ 奥様が吐き気を！ もしかしたらっ兄弟ができるかもっしれないです。」

慌てているのはよく分かった。って……………え！！ それは妊娠と一緒ものですか？？

すぐさま医者が呼ばれ、診察が開始された。父上にも連絡はいれておいた。

結果として、妊娠していることが判明。おいおい……………いい年な

んだからさ。母上はもともと体は強くない。4児の母だし、万が一はないと思うけど。

「クリームは弟と妹どっちがいい？」母上がベットに横になりながら話しかけてきた。大分楽になったみたい。

「弟がいい」

「ふふ、分かったわ。任せてね」

いや、無事に生まれてくるならどっちでもいいんだけどね。直ぐに父上も帰ってきて、軽くお祭り騒ぎになった。全く、本当に仲がいんだから。

暇になってしまったので、魔道書を軽くおさらいして屋敷の散歩にお……あれは……籠を片手に持ったリリースを発見！

「どこいくの？」ふふ、この時点についていく気満々な僕。

「あ、クリーム様。奥様に果実をと頼まれました」

「じゃあ行こうか」

リリスの空いている手を取り、不撓不屈の構え。

「いえ、クリーム様は屋敷でお待ちください」

やっぱり断られた、が、めげない。作戦変更だ。

「僕が選びたい！ 母さんに！ お願いだよりリス」

15分ほど粘ったら納得してくれた。渋々だったが。いや……買
い物は初めてなので、どうしても行きたかった。母上にも選んであ
げたい。これは本心だ。一応心の中で謝しておく。

僕が住む街はガイゾルといい、一見砦のような街だ。城塞都市と言
えるかもしれない。丸ごと堅牢な壁が覆っている。東は首都ギルバ
ート。西には経済特区ともいえる港があり、交通の要所だ。それだ
け人の出入りが激しい。父上のお陰で治安は比較的良いとか。珍し
い特産品や貴重な鉱石など、色んな物が街に入ってくる。

「うわ」

リリスと来たのは、この街の住人の大半が利用する市場だ。道の端

から端まで食べ物で溢れている。一種の交流の場でもあり、同じように人で溢れていた。色んな物が目白押し。ただ魚の臭いはキツかった。冷蔵庫とかないからな。腐らないのだろうか？ とりあえず、パイや風味の黄色い果実を無事に3つ購入した。

ふと、市場の隅から黒いフードを被った何かが飛び出してきた。避けきれずに思いつきりぶつかる僕。少し離れていたリリスがそれを見て駆け寄ってくる。

「クリーム様！」

大丈夫だからと手で合図し、しりもちをついているぶつかってきた相手に目を向けてみた。

子供かな……………僕より小さい。起こしてあげようと手を差しのべたが、思いきり弾かれた。リリスの顔が陰しくなる。だが僕は、そんな彼女には気付かず、目を見開いて相手を見つめていた。

目の前の子は、金髪の髪に尖った長い耳をした、神秘の生き物。エルフの女の子だった。

十一話 冒険

この世界には、エルフやドワーフといった多様な種族が大陸の各地に存在する。だがそれは少数。人と比べ圧倒的に数が少ない彼らは、自身の生まれた地から滅多に出ることはない。

まず人里にはいないはずなんだけど。僕はまだこの世界のことをよく分かっていないのかもしれない。目の前の女の子は……………僕を仇を見るかのように睨んできた。ほんのの一瞬、視線を交わしたただけで、憎しみが、怨みが伝わってくる。

ぞくつと背筋が凍った。そんな僕を軽蔑するように睨む幼い瞳。ぶつかった衝撃から黒い汚れたフードは取れ、日の光を浴びた金色の髪と反りたった耳があらわになっている。

慌てた仕草でフードを被るが……………右頬に殴られたのか青い痣があった。咄嗟に声をかけようとしたが、彼女は立ち上がり、振り返ることなく人混みに消えていった。

……………エルフに初めて会えて感動したけど……………睨まれたただだった。正直傷ついた。悪意には久しく無縁だったからか、あの子のよせられた眉が、暗い瞳が頭から離れない。

そんな僕に、リリスが「申し訳ありません。私が注意を怠ったばかり

りに……………」と、謝りながら心配そうに話しかけてきた。

リリスには悪いが、ガラスのハートである僕には結構今のは堪えた……………大丈夫だよと乾いた笑みで伝えたが、沈んだ気持ちのまま屋敷に帰った。

母上には心配かけられない。頑張って普段通りに振る舞い、早めに部屋に籠ってぐーすかふて寝した。

翌日、僕は見事に復活！僕の数少ない長所の一つだ。落ち込むのも早いが復活も早い。引きずっても仕方ないしね。

それにしても、あのエルフの女の子が頭から離れない。あの子は何者なのかにも興味がある。起こしに来てくれた心配そうなりリスに元気よく挨拶し、美味しく朝食をいただいた。さて、何とかしてもう一度会えないものか。ない知恵を絞り出そうと36年間の知識を総動員するが……………やばい、なんも思い付かない……………

誰かに相談してみようか。父上はラミレス家お抱え騎士団の訓練に出掛けるだろう。聞くところによると、父上の剣の師匠がマンツーマンで僕に稽古をつけてくれるらしい。百戦錬磨の現役の傭兵だとか。何とも耳の痛い話だ。母上は今朝は体調が奮わず、微熱があるようで、部屋で休んでる。まあ父上も母上もリリスも、相談しても

一人じゃ外出は認めてくれないだろうな。

となると……………精霊クリファ！ もとい光ちゃんならエルフさん簡単に見つけてくれそうだ。希望的観測だけだね。いつも何処にいるのか知らないので、部屋でじっと待ってみる。すると、割りと簡単に姿を見せてくれた光ちゃん。

かくかくじかじかなんだ！ 頼むと頭を下げてエルフさん探索の手伝いを頼んでみた。

光ちゃんは、おもむろに顎に手をあて思案のポーズ。そして、ゆっくりと両手を……………前に交差してきやがった！ これは×か！ 本当に精霊なのか？ めちゃくちゃ人間っぽいんだけど……………嫌みたっぷりか！

僕は昨日に引き続き、またもや傷ついた。じゃあいいよと、半ば意地をはってとぼとぼ部屋を出る。

さて、どうしようか……………ってあれ、光ちゃんが何故か付いてくるぞ。不思議に思ったが、今度は両手でやれやれのポーズ。無論、肩をすくめるのも忘れない。光ちゃんはまごうことなき天の邪鬼、もしくはひねくれ者のようだ。とりあえず、強力な味方が出来た！

調子に乗って、君をエルフ探索隊の隊長に任ずとかふざけて任命したら、大きく胸を張って何度も頷いてる。嬉しそうだな。子供みたい。人の事言えないけど……………よし、まずは屋敷を出なくてはいけないな……………居ても立ってもいられず、僕は行動を開始した。

ごめんね、コウくん。僕は一目散に走った！ 光ちゃんにコウくんともう一人に指先から閃光弾をかましてもらったのだ。実際は単なる目潰し。ゼロ距離から懐中電灯でフラッシュを浴びせるようなものだ。だか効果はテキメン。小さな悲鳴と共に、目を押さえるコウくん達。まあ一時間くらいで帰れば大丈夫だろ。昨日会えた市場に全力疾走する！ 横では光ちゃんが悶える二人を見て腹を抱えて笑っていた。

悪いとおもいつつ……………思わずつられて笑っちゃったよ。

初めての冒険だ！……！

十一話 冒険（後書き）

????????????

このアクセス数は一体？三日目で5万超えてるんですが……………何だか気軽に投稿できないです。

誤字や文法おかしいところは、正直携帯だと修正が面倒くさくて……………パソコンが使えるようになったら改訂しますね。ちよくちよくへんなともばっさり直したり追加で書いてくので、ご了承下さい。

青年編まで書いて完結するのが目標です。ちょっとペース落ちますが、ゆっくり楽しんでいただければと思います。

やる気のもととは感想です。一件間違って消しちゃった？かもしれないので、この場を借りて謝っておきます！すみません！感想くれた方、ありがとうございます！

それでは！

十二話 不幸な遭遇

市場に到着した僕と光ちゃん。ぶつちやけて言うとなープランだ。逸る気持ちを抑えきれず、勢いで屋敷を飛び出してきちゃったから。しかし、僕の横には頼りになる相棒がいる。

「隊長！ 見つかった？？ 気配とか分からない？」

傍目からは痛い人間に見えたかもしれない。右隣でキョロキョロしている光ちゃんに、早速聞いてみた。

けど、分かるわけねーじゃんとかばかりに素っ気なく手を降る光ちゃん。……………戦力にならない？ 一抹の不安をかなぐり捨てて、黒いフードのちびっこを探し始める。

昨日ぶつかった辺りで一通り探してみたが、それらしき人物はいない。偶然ぶつかっただけだし……………ひたすらこの場所で現れるのを待つしかないのかな。

ぶらぶらと市場の見学しつつ、なんとかなるだと、気楽に考える僕。昨日と変わらず人で一杯だ。というか、よく見ると面白いのがあるぞ。背中に大剣をぶら下げ、灰色の武具で全身武装した要塞みたいな大男。外せばいいのに、こだわりなのか歩くたびにガシャガ

シヤと金属音がやかましい。戦争にでもいくのだろうか。

ドン・キホーテみたいなの他にいないかな？……………おっと、左から緑色の外套に、もさもさの髭をつけた男爵みたいなのが、頭に赤いバンダナを巻いたグラマーな美女と一緒に歩いてくる。デートか？ いや、そんな感じじゃない。こいつらを結び付けているのとは一体なんだろうか……

普通の住人に混じって、一風変わった人が歩いていく様は、とても面白い。

ドラクエが何かのゲームの中みたいだ。市場の売り物も隅々まで見学したので、今度は人を観察しながら適当に歩いてみた。ひたすら道なりにずんずん歩いていく。

やー、飽きない。海外旅行気分でしばらく浮かれていると……………迷った……………知らない道を歩いていけば、当然こうなるのは自明の理なのだが、今更何を言っても……………さて、市場はどっちだろ。困ったときの光ちゃん！ にはまたもや知らねーよと手を振られた……………役に立ってはくれないようだ。人選ミスは明らかだった。今後の参考にしよう。

適当におおよその方角を決めて路地裏に入ってみた。というか、冷静になって考えると迷子はヤバいのでは。お金もない。あるのは朝

食を食べた後にくすねた、冷えたひとときの黒パン一つ。布に包んでポッケに入れといた。昼にかじろうと思つて。

頼むから前世に僕を苦しめた方向音痴は治っていてくれ、切に願う……護身用に短剣でも持つてくれば良かったな……って考えながら道を進むと、剣で撃ちあつたかのような火花の散る音が響いてきた。

うん。やっぱり物騒みたい。身代金目当てに誘拐されたらどうしよう………てか一体何があつた？ 光ちゃんも気になるようで、いつてみよーぜと、音源の暗い曲がりくねつた不気味な路を指差している。どうやら僕の安全と、自分の好奇心とは天秤にかけるまでもないみたい。

仕方ない………恐る恐る歩を進めていくと、二人の人相の悪い男が倒れ、それをちびつこが剣を片手に見下ろしていた。

思わず駆け出した。間違いなく、昨日会つたエルフの女の子だ！ 偶然！ 殺人現場のような殺伐とした場所で会えた！ なんだこれ、タイミングが悪すぎるだろ！ つくづく自分の不運を呪う。

「あ………似てないのにむかついた顔の子だ………ボクに何か用？」

しかも変な覚え方されてるし。むかついた顔はあんまりだ！ それにボクってどういうこと……………

出会って二回目だが、謎は深まるばかりだった。

十二話 不幸な遭遇（後書き）

十三話 逃亡

勢いで会いに来ましたとも言えず、とりあえず頭に浮かんだ疑問を解消するために、思い切つて聞いてみた。

「君つて男の子？」

「……………そうだよ。初対面でそんなこと聞かれたことはなかったけどね」

そりゃーそんな綺麗な顔してたらね。薄暗いからか、真つ白な肌がいつそう際立ち、波に揺れるような黄金の髪は神秘的だった。何故かは知らないが、その大きな二つの瞳には昨日のような嫌悪感は見られなかった。いや、何だかちょっと不機嫌みたいだ。目は口ほどにものを言つとは聞いたことあるけど、この子は分かりやすいな。男つて見破られて悔しいのか？

「僕はクリム。君は？」

「……………シルーレ」

「女の子みたいな名前だね」

ジロツと睨まれた。地雷を踏んだらしい。いやだって、男の名前には聞こえないじゃないか！ どうかの神様の名前からとったのかな？ 声も女の子にしか聞こえんのだけだ。

「……………父様と母様に貰った名は捨てられないから。ボクは男として生きてくんだけだ」

よく分からない。男なんだったら当然じゃね。一択のはずだけど。光ちゃんに助言を求めたかったが、いつの間にか消えてる。そう言ええば人見知りなのすっかり忘れてた。

「まあ、それはあなたには関係ない。こいつらの仲間ってわけじゃないみたいだし……………」

シルーレは、片手に持ったレイピアを流れるような自然な動作で僕の首筋に当てた。動けなかった。こいつ、何者だ？ 寒気がする。

「とりあえず、お金か食べ物ちょうだい」

懐と腹を空かしたチンピラだった。お昼にはまだちょっと早いですよ……………」

あの場に倒れていた男二人は命に別状ないようだ。一応手当はしといたけど。てか何だこやつら？ 幼児趣味の変態か？ ちゃっかり男の財布を抜き取っていたシルーレは、とても遅しく見えた。

市場まで道案内してもらった約束を取りつけ、黒パンを渡す僕。別に脅されたから出すわけじゃないぞ。交換条件ってやつだ。歩きながら、シルーレは黒パンを美味しそうに頬張っている。

「シルーレは何でこの街に来たの？」

ただ歩くのも暇だったので聞いてみた。フードを被っているのも黒パンしか見えない。どんだけ腹を空かせてたんだろ。

「んぐ……………殺したいやつがいるんだ」

仕草は可愛いけど、言ってることが怖い！ 怒りバージョンのターニャ姐が脳裏をよぎった。念のため二歩分シルーレから離れといた。

「……………誰を？」

「人間。」

人類を抹殺しにきたんかこのチンピラは。どうみても黒いフードを被った怪しいちびっこにしか見えないが、実は暗殺者が殺人鬼だったりするのか。

「右目に大きな縦の傷。男。赤い髪。悪魔」

続きがあって心底ホツとした。けど、あんまり深く追求しない方がよさそうだ。何で睨まれたのかはまだ分からないけど、複雑な事情があるんだなと、勝手に自己解釈している僕を放っておいて、シルーレはどうやら食べ終わったようだ。今度は僕に質問を投げ掛ける。

「あなたは？今まで見たどの人間より、綺麗な服を着てる」

「ラミレス家の三男」

「……………ラミレス家？」

「あれ。この街で知らない人がいるとは思わなかったな。」

「だってボクが来たのは4日前だもん。ここなら何か分かるって思ったのに、奴隷商人や変なやつしかよってこない。はあ……………だ

から人間は嫌いだ」

「は？ 奴隷商人？」

「奴隷商人が、ボクに賞金かけたみたいなんだ。さっきの奴等が言
ってた。お陰で困ったものさ」

唇を尖らせながらぶつぶつ文句を言うシルーレはとても可愛らしい
が、今はそれどころではない。

僕の頭は奴隷商人という言葉を何度も反芻していた。奴隷、人買い、
追っ手…………… エルフの子供に貴族の三男坊…………… 鴨が霜降肉と
高級ネギと鍋道具一式を背負って飛んでくるようなもんじゃないか
！ ヤバい！ この組み合わせはヤバい！

でもシルーレを一人にするのも危ないし…………… どうすれば……………

「見つけたぞお！！！！！！ エルフのガキだあ！」

怒鳴り声が聞こえてきた。どうやら考える時間はない。屋敷まで着
ければ僕の勝ちだ。そこまで逃げきるしかない。急いでシルーレの
手を取り、脇目もふらず全力で走り出した！

十四話 拳骨を初めてくらった

はあはあ……………また死ぬかと思った！手を繋いで、というか強引に引っ張りながら走っている最中、あいつらを倒せばいいとかシルーレは言っていたけど、足手まといがいる状態で勝てるとは思えない。後ろから3人、左前方に1人、ナイフを片手に追っかけてきやがった。怒気丸出しで大人気ない。あれ殺す気なんじゃないか……

……

シルーレと離れるのは、囹に使うようでも嫌だった。正直倒せるとも思えないし。昨日見た頬の青痣が目につく。薄暗かったし、すぐにフード被っちゃったから忘れてたな。見られなくなかったのかもしれない。

何とか小回り行かしてぐり抜け表通りへ。人混みを生かして縫うように走り抜ける。だが全く諦める様子はない。

「おい！人手を集めろ」

と叫ぶ怒声が鼓膜を痺れさせる。ここが何処だか分からない中、逃げ切るのは不可能に近いか……………

このままでは、過酷な奴隷生活が待っているかもしれない。奴隷制度がこの国にあったのには、結構驚いたが、それほど不思議でもない。前世の歴史を鑑みれば、十分あり得るだろうと妙に納得してしまった。

恐らく男は労働力として、女は娼婦か貴族の玩具か、どちらにしろ考えただけで気持ち悪い。もしシルーレが捕まったら、一体どうなるのか。まあ、大方の検討はつく。奴隷商人から、何としてでも守ってあげたい。

光ちゃんとは相変わらず姿を見せない。これからはもう絶対頼らないぞと心中深く誓っておいた。

息がもたない……………そろそろ体力の限界……………だ。

追っ手も撒けたみたいだし、少し休憩しようとしてシルーレに顔を向けた。

「……………手……………」

ん？何だ？恥ずかしいのか分からないけど、ちょっと戸惑ってるみたい。じっと手を見つめている。

「ああ、気に障ったらごめん」

パツと手を離す。疲労からか、心臓の鼓動がやかましい。周りを見渡してみた。

ますます道が分からなくなった……人通もないし、どっかの屋敷に入れば良かったな。けど相手が悪いか……どこまで手が回ってるか分からない。

思考にふけていたが、どうやら追っ手に捕捉されていたようだ。物陰から、嫌な笑みを浮かべた長身の男がこっちに歩いてくる。似たような怪しいのが合計6人。

完全に囲まれたらしい。

前世では無意味に死んだ。

ここでシルーレを守って死ねるなら、まあいいかと、僕はシルーレを庇うように大きく手を広げた。

そんな様子が滑稽に見えたらしい。囃し立てる男達。獲物がもがけばもがくほど、それを狩るあいつらは嬉しいんだ。

僕には全く警戒を抱かないその余裕。死ぬほど後悔させてやる。ま

ずは先の先。油断しているあいつに飛びかか……………

「ボクがやるよ」

いつの間にか僕の前にはシルーレが立っていた。途端に警戒の色を見せる男達。手に手に剣やナイフを構え始める。

「krimは人間とは思えない。昨日は睨んで悪かったね」

無理だ。この数相手に、子供が一人で勝てるわけがない。だがシルーレに引く気はないようだ。右手には抜き身のレイピアが握られ、剣先は男達に向けられていた。

「まさか人間を守ろうと思う日がくるとはね。krimは危ないからさがってなよ」

左手は僕を庇うように広げられていた。シルーレが膝を曲げ、何かを唱え始めたところで男の一人が唐突に崩れ落ちた。え！！！！！と言葉が出なかったが、それはシルーレも同じだったらしい。

「krim！無事だったか？」

最高にカツコイイ蒼き獅子の声は僕に底知れぬ安堵を与え、男達に

は抗えぬ絶望を与えた。いや、そんな暇さえ与えず、瞬きする間に全員をねじ伏せた。

「心配かけやがって！」

ガシガシと頭を撫でてくる父上。後ろには何人も武装した人たちがいて、気を失っていた男達を縛り上げた。

「そいつらは許すな。背後にいる奴全員捉えろ！」

「は！」と歯切れのよい返事をして、彼らは男達を運び出した。

部下に指示を出す父上に守られながら、戸惑うシルーレと一緒に屋敷に帰った。途中、シルーレがそつと手を握ってきた……………はて？

どうやら光ちゃんに感謝しなくてはいけないらしい。どっから見てもたのかは知らないけど、僕の危機を母上に伝えてくれたんだって。既にリリスやコウくん達が僕を搜索していたらしいが、追われているというこの事態に、ラミレス家の騎士団が動いたらしい。

奴隷商人は誘拐未遂容疑で逮捕。本人は否定しているらしいが、相当悪い男だったらしく、他にも誘拐まがいの違法な売買をしている

た。一生牢から出られないだろう。

母上には泣きつかれ、罰として父上には大きな握り拳で拳骨を脳天にお見舞いされた。

シルーレはお金がないし、僕を守った恩人ということで客人扱いに。

「しばらくやかいになるよ。よろしく」

本人も乗り気なようだ。

一方、僕の知らないところでメイドたちの間では、シルーレと僕との関係は一体どこまでいつてるのか。噂が絶えなかったらしい。

後日談

「あれ？女の子だったの？」

即座にしくじったと悟った。思ったことをノータイムで言う癖を何とかしなくては……………

お風呂に入り、綺麗な寝間着に着替えたシルーレがリスに連れられ僕の部屋にきたのだ。その姿は明らかに女の子だった。風呂上がりだから頬が赤みをおび、濡れた髪は年不相応に大人びて見えた。

何か色っぽい。リリスの腕に隠れ、そつとこつちを伺っていたのだが……………再度言おう。しくじった！

「……………」

「……………クリーム様」

シルーレは黙り、リリスは憐れみの目を向けてきた。扉のすみっこから様子をこっそり見てた他のメイドたちも、こいつの目は腐ってんのかって感じでこつちを見てる。

「いや、いいんだよ……………復讐の為に男になるって決めたんだから……………ただクリームには気づいて欲しかったな」

悲しそうにとぼとぼ出ていくシルーレ。追いかけると殺気のこもったいくつもの視線が僕を突き刺す！

「ま、待ってよシルーレ！」

図らずもシルーレとの噂をかきつけたのは、僕の女の子とは知らなかった発言だった。ただ、クリーム様は節穴で女心が分からない子供という烙印は押されました……………

十四話 拳骨を初めてくらった（後書き）

ここからは、またまた変なキャラや姫が出てきます。

それと……………とりあえず、謝つときます！この先の展開がちょい悲しい。まあ暇潰しに読んでやるかって人だけ読み進めて頂ければと。

では、読んでいただきありがとうございました！

十五話 最強のジジイ

あれから2週間。思い出すだけで腹が立つ。あの場に父上が来てくれなかったら……シルーレを守れず、またもや無駄死にしていたかもしれない。無力な自分にどうしようもない怒りが沸いてくる。

父上との稽古に、僕は全てをぶつけていた。だが父上は執務やなんやら、とにかく忙しい。そんな時は、僕より数段強いシルーレと模擬戦をしている。未だに勝てないのが悔しい。治癒魔法も、母上につきっきりで学び、薬草の知識も辞典で独自に仕入れている。

そんなこんなで充実しつつも疲れた体を休ませる僕。すると、部屋の扉が勢いよく開かれた。

「おい坊主！お前がクリムか？？ああ、その髪はあいつのだ。わしについてこい。早速稽古をつけてやる」

うわー……………圧倒された。筋肉の鎧がくまなくつき、ところどころに古傷が見える。結構な年だろうに、全く老いを感じさせない。むしろ若いし、生命力に溢れている。

のしのし歩くその背は、僕に地獄の到来を告げていた。

カストール・グラン。この破天荒なジジイが僕の師匠になるらしい。まあ……………強そうだ。血染めの戦鬼と呼ばれている化け物。羅生門にでも一生住み着いてもらえないだろうか。ラミレス家は、武家の名門。甘えは一切許されないっぴいです。

最初は何を教えてくれるのかなって思ってたなら、軽い剣を渡された。かかってこいだって。

よく分からないけど、打ち合いながら教えてくれるのかなって思った僕は甘かった。絶妙な力加減で散々に打たれて打たれて打たれまくった。次の日も、その次の日も。

治癒魔法がなかったら2日でねをあげていただろう。

これは虐待じゃね？リリースが稽古中に悲鳴をあげて飛び込むことがたびたびあったぐらいだ……………自分の無力が嫌で堪らなかったからこそ耐えられた。自分の体で治癒魔法を色々試せたのもいい経験。ちょっとシニールだけど。

シルーレも稽古をつけて貰っているが、僕のように打たれはしない。剣筋が甘いだの、もっと鋭く先読みしろだの……………もの凄い差別を感じた。

やっと打たれまくる日々が終わったと思ったら、今度は無手、剣、槍、斧の型と動き、呼吸の仕方まで体罰込みで体に叩きつけられた。

それが終わる頃には、稽古終わりの模擬戦でシルーレといい線で戦えるまでになっていた。

軽く調子に乗る僕。次もどんとこいや！とか思ってたら、また散々に打たれまくった。ジジイにはどんな型も通じず、同じ型でやり返される。

それでもめげずに死ねやジジイ！と殺意全開で特攻する。恐らく週に3日は死の数歩手前をさまよっている。母上は涙ながらに頑張りなさいと、アレンのように強くなりなさいと叱咤してくれる。僕のために泣いてくれているのだ。頑張れないわけがない。

僕は必死に稽古に励み、治癒魔法も学び、屋敷の本を研鑽しまくった。

ちなみに、兄上たちは1日で屋敷に引きこもったらしい。一週間もたず、仕方なくカストールはひたすら素振りさせといたと僕に言ってきた。

「坊主は見所あるぜ。わしが保証してやる。親父なんてすぐに越えさせてやるわい。」

あれ？ズルくね？彼らには素振りで僕にはこれか！慣れる前に早く言っただけだった。これは5歳児にやることじゃないだろうに。

「あいつらは才がない上に根性がなくてな。ありや将の器じゃあねえな。あれが跡取りじゃあアレンの奴も可哀想だたあ思ってたが、坊主がいるなら何とかなんだろ。」

僕に才能があるとは思えないけど。正直、まだシルーレに勝てないし。不思議そうにしてる僕を見て、ジジイはニヤニヤしている。

「戦闘魔法はわしの専門じゃねえから、学園でじっくり学びな。適正がありあ精霊石のついた武器で十分だろうがな。じゃあな坊主。傷治しとけよ。」

「は……い。」

ガハハと豪快に笑いながら今日も去っていく。まだ一発も当てられない……ちくしょう。動けない……

そんな僕の前に、シルーレがやって来てしゃがみこみながら、

「今日もお疲れだねクリーム。そろそろ明日さ、買い物付き合ってよ」

頬をちょんちょんつついてくる。おい！動けないからって、人の体で遊ばんで欲しい。

シルーレは屋敷に随分と馴染んできていた。最初はぎこちなく、距離を置いていたようだが、母上やリリスのお陰か、楽しそうにメイドとお喋りするまでになっている。

友達が出来たのは僕も嬉しい。まだ詳しい過去は知らないが、復讐に燃えているという彼女。いつか何とかしてあげたいものだな。

そして月日は流れていく。川の流れのように、止まることなく進んでいく。時も、人も。

十五話 最強のジジイ（後書き）

こんな激しい稽古、貴族にさせるわけないじゃんと思いがきそうですが、まあご勘弁を。

カストール流の一種の天才教育方なので。貴族だからこそ加減せず。教えた人も人によって千差万別。伸びる奴はめちゃくちゃ伸びます。

次は迷ったけど書きました。クリムのスローライフを見守ってやってください。

十六話 神様を恨んだ日

いよいよ母上のお産が間近となった。最近は一弱二強になっているのか、遺言めいたことを言うのが辛い。もしも何て言わないで欲しい。

いい忘れたが、治癒魔法は決して万能ではない。その人物の寿命が終わりを迎え始めると、どんな魔法も意味をなさない。命は延ばせないのだ。母上は寿命は神様からのプレゼントだから、欲張れないのよと僕に教えてくれた。

産まれてくる子が、

弟なら「ライク」

妹なら「クレハ」

だ。父上と名前を考えたらしい。

明日には久しぶりに兄上たちとターニャ姐が屋敷に帰ってくる。僕の剣の腕を見てもらおう！今ならターニャ姐ともいい勝負なのではなからうか。

結果はぼろ負けだった……………

5日後、僕にとっては初めての妹が出来た！産まれたと聞いたときは、ターニャ姐と抱き合って大喜びしたものだ。

「クレハを可愛がつてあげてね。」母上の笑顔はとても優しくかった。無事に産まれた！母上も元気そうだ！もうあれだね。父上も狂喜乱舞って感じ。屋敷は幸せに満ちているようで、その日はぐっすり眠ることができた……………

その翌日の朝、母上が死んでいた。ベッドの上で。眠るように。懐かしの揺りかごでクレハが泣いても、母上はぴくりとも動かず、静かに眠っていた。

……………信じられなかった。ここからの記憶はあまりない。泣いて、叫んで、また泣いた。

数日後、街をあげての盛大なお葬式が執り行われた。父上は涙を最後まで見せなかった。兄上たちは泣いていた。ターニヤ姐は僕を心配してくれて、傍らにいて僕と共に泣いていた。シルーレもシヨックだったようで、呆然と庭を眺めていた。光ちゃんは何処にも姿を現さなかった。

昨日と言う日が嘘みたいだ。屋敷は静まり、笑顔が少しも見られない。

だが、一番可哀想なのはクレハだ。よしゑさんにくりそつな乳母が雇われ、リリスがよく面倒をみてくれているが、この空気を感じ取っているのか元気がない。すぐにぐずりなかなか泣き止まない。

見かねて僕がクレハをあやしてあげた。不思議と僕が抱っこすると泣き止んでくれる。指を嬉しそうに握ってくる。笑ってくれる。

ダメだな……………悲しんでる場合じゃないや……………僕が転生した使命はここにあるんじゃないだろうか。

泣くのは今日が最後だ……………目から溢れでる涙はあえて拭わなかった。流れるままにさせといた。体が熱い。心臓の音がはつきり聞こえてくる。辛くて、悲しくて、寂しくて、悔しくて、いろんな感情が体中を駆け巡る。前世では体験しなかった。僕には記憶になかったから。なんで僕だけ残したんだろう……………と考えたくらい。あの意味初めての肉親の死だ。

僕はこの日母上に誓った。クレハを抱き締めながら、父上を兄上をターニヤ姐を妹を家族を守ることを。

前世で一番欲しかったものが、今ここにあるのだから。

十七話 悲しみ乗り越え六歳に（前書き）

十七話 悲しみ乗り越え六歳に

あの日からクレハの面倒を見始めた僕だが、来年にはラスルコフ学園に通わなくちゃいけない。馬車を使って半日程かかる道程だ。寮に入らなくちゃだし、何とかしないと……もうあれだね。街にある普通の学校でよくね。市民や商人の子たちが行く学校の方が気楽でいい。

リリスには駄目ですと、ラミレス家のご子息が名もない学校に入るなんて、ありえませんか何とか。ターニヤ姐にも、ラスルコフ学園に行くって言っちゃったしどうしたものか。

父上は精力的に執務に勤しんでる。父上の執務室には前よりも多くの人が訪れるようになった。ひたすら仕事に没頭している。

時間が父上を癒してくれればいいが……僕には労ることしか出来ない。一日に飲む酒の量が明らかに増えていた。

兄上、ムウリはラスルコフ学園から、王国軍騎士団に入隊した。彼はラミレス家次期当主なのだ。すぐに出世し功績を挙げることだろう。スメルは騎士団に入る気はないようで、気ままに遊んでいる。ラスルコフ学院に進学する気なのだろうか。良くは知らない。

ターニヤ姐はまだまだ学園生活が残っている。名残惜しそうに戻っていた。そうそう、シルーレとも模擬戦をやったんだ。ターニヤ姐の圧勝だった。あの強さの源が知りたい。何故あんなに強いんだろうか……………父上はターニヤ姐に剣の師匠はつけてなかったんだけどな……………

まあ、なんやかんやで屋敷が一気に狭くなった。午後からジジイが来てくれるそうだが、全然嬉しくない……………クレハをあやしなから、魔道書を紐解いた。人間の死亡率並みの確率で使うことになるからだ。

赤ちゃんてこんなに可愛いんだな……………お、笑ってる笑ってる。はあゝ癒されるな……………お、光ちゃんがやってきた。揺りかごを前に膝をつき、両肘を揺りかごに、手を顎の下に置き鼻歌唄ってるのかつてくらいご機嫌な笑顔でクレハを見つめている。

約3年の付き合いだが……………誰だこいつ?……………こんなデレデレしている光ちゃんを見たことない。正直気持ち悪い。

クレハも、光ちゃんを見えているかのような反応をするんだよね……………もしかしたら、僕以上に才能があるのかも。まあまだ0歳。すくすくと育って欲しい。

「おい坊主！来たぜ。今日は街を出るからな。気合い入れろよ。」

「あゝん！！！！！！！！」

やべ、クレハがジジイの声が聞こえた途端大泣きした。まあ、もじやもじやの白髭男が突然入ってきたんだ。クレハは空気に敏感だし、ダブルでビックリしたのかもしれない。メイドさんに呼んでもらえばいいのにさ、全く。

……………あれ……………光ちゃんがジジイにガンつけてる。めっちゃ近い。けどジジイは気づかない。幽霊が巨漢に喧嘩を売る図。結構希少価値がありそうだ。無反応に怒ったか、ジジイの前でファイティングポーズを取る光ちゃん。世紀の一戦が見れる！

「おおすまんすまん。シルーレ連れて早くこい。ギルドにもよつてかにゃあいかなからな」

わきやないか。頭を掻きながら去っていくジジイ。その後ろ姿に殴り付ける動作をする光ちゃん。いや、これはこれでありか……………面白い。

「はゝい」

クレハを抱っこしつつ、珍しいものが見れた興奮と、外に初めて出るという期待で僕の胸は膨らんだ。

十七話 悲しみ乗り越え六歳に（後書き）

書いてるって知らない弟に、この小説の感想聞いてみました。

「日間一位にはなれない作品かな」

だって。いや〜……笑えます。確かに今の読者さんの数がもう奇跡！

テンポだけが取り柄のヘンテコ小説。どうかよろしくお願いします。
評価等頂ければ幸いです。

十八話 魔物を殺せと言われても

クレハは光ちゃんとよしゑさん2号に頼んどいた。ああ、僕が手を離すとまたもや大泣きする。それを見た光ちゃんは嫉妬したのか、早く消えろと蚊を追っ払うかのように手を払ってくる。

普通にムカついた。精霊に攻撃は出来ないのだろうか。書庫でそれらしき本探してやる。

シルーレと共に、ジジイに連れられギルドに到着！

ああ……………ドン・キホーテを連れてきてあげたい。我輩の姫はどこにいるー！！とか言って、あの受け付けらしき男に殴りかかるか、麗しの姫よー！！とか向こうにいる美人の女戦士にかしずくんだろうか。お付きの小男は何をするかな。止めるか、主を自慢するか、自分も暴れるか。

と、妄想を巡らせる僕。それほどこの空間は僕にとって独特の屋敷の匂いが、雰囲気、人がドン・キホーテで読んで浮かべた空想の世界に近かった。

木製の古びた扉を開けると、正面には長い机が置かれ、2人の受け付けらしき男が座っていた。その内の一人に話しかけるジジイ。左

を向くと、ずっと奥まで四角いテーブルがいくつも並べられていた。宿屋と提携してやってるのかな？上に続く階段もある。何人か椅子に座り、談笑しつつ食事をしていた。酒臭い……昼間から飲んでるのか……

異様なのは、皆が皆武器を腰か背中にぶら下げているところだ。黒いローブを羽織った魔法使いはいないか……筋肉質な荒くれものってとこかな。

女性はさつき見つけた女戦士と、店員さんらしき人だけだ。子供が他にいないからかな。何人かこっちを見てる……いや！

どうやらジジイに注目が集まっている！モテモテだな！ちなみにジジイは独身である。

「何か依頼あるか？クロメス草の採集か、下級の奴の駆除がいいんだが。」

クロメス草でお願いします！それなら知ってる。生態や効能まで何だって！この時期は数が少ないかもだけど。

「少々お待ちを……ラチグルの駆除依頼でしたらありますね。5体につき、銀貨1枚と銅貨30枚が支払われますが」

ラチグルって何？知らないんだけど………駆除だから、魔物だよな！？見てみたいけど、殺したくない。

環境は人を変えると言われているが、さて………ま、人よりはマシか。いつか人を殺さなくてはならないのかな。そんな状況、あんまり考えたくはない。

前に買った果物が3つで銅貨2枚だったっけ。そう言えば、銀貨とか金貨の価値がいまいち分からない。市場では買う気なかったから品物眺めただけだし、基本銅貨で買える値段だった。衣食住含めて暮らしに不自由してなかったからな………後でジジイカリリスに聞いておこう。

「………仕方ねえわい。それでいい。どっかに異常繁殖でもしてねえか？こいつらにやあ、ちとラチグルは温いんだよなあ」

人を殺したいと思ったのはこの世界では初めてだ。前世はうざい親戚の気持ち悪い男………っ！もしや、これがさつき忌避したいと願ったシチュエーション？ジジイを凄く殺したい！光ちゃんがジジイ倒してれば良かったのに。

まあ、この化け物は笑いながら魔法だろうが何だろうが跳ね返すんだろうけど………冗談抜きで。

「少し離れたウルド地方でしたら大量のラチグルを含めた魔物が確認されていますが………」

そうだ！諦めるジジイ！

「ふうむ。まったく運がねえな。ウルドっていったらまあ歩いて2日
つてところか。走れば1日と少し……………」

あれ？

「足腰の鍛練にやあ丁度いいか。面倒くさいがいい経験になりそう
だな」

「ねえクリム。何日くらい泊まることになると思う？」シルーレは
ちよつと嬉しそう。

兄上……………僕も部屋に引きこもりたいです。

外伝 驚異のフットワークローラ姫

最近、自分の精神年齢が劇的に下がってるのではないかと疑問に思う。前世では、割りとクールだったような。一歩引いて物事を見てただけかも知れど。周りが子供として扱うからか………友達もシルーレ（子供）しかいないし、いや元々自分はガキっぽかったのか

………

自分のキャラ探しを部屋のベツトに寝転がりながら黙々とする僕。この時点で十分ガキかな〜っと思ひ始めたその時だった。

「クリーム様！あっあの！」

リリスが息を切らせてやって来た。なんだろ？いつも冷静なしつかりもののリリスらしくない。母上が妊娠した時の狼狽っぷりが懐かしく思える。

「久しぶりじゃのう、クリーム」

リリスの後ろに幻覚が見えた。おまけに幻聴も聞こえてきた。僕はいつの間に寝たんだろつか。間違ってもここにいるはずがない、王

国トップクラスの高貴なお方がそこにいた。

「おいクリム！妾の顔を見忘れたか？」

はて、どこの暴れん坊將軍だろう。少し背が伸びた紺色のドレスを着たローラ姫が、腰に手をあて叫んでいる。一年ぶりになるのかな。時が経つのを早く感じるのは、どこの世界でも同じらしい。

相も変わらず神出鬼没だ。一国の姫が、何の連絡もなしにお忍びで来るとか、かなり無理があると思うんだけど。いつか国王に直訴してやろうか。これは心臓に悪すぎる。

「……………ローラ様。お久しぶりにございます」

現実を認めることにして、身体を起こしてそのまま方膝を地面につけた。王家と公の場で挨拶する作法は、右手を胸に当て、膝をついてお決まりの文句を言わないといけない。だがこの場はいらなかったみたいだ。いらん、と言われたので、ゆっくり立ちあがりながら用件を聞いてみた。

「うむ。マリアのことは残念じゃったな。まだまだこの国に必要な人材であつたのに……………」

「……………本当に……………そう言っていただけで、母も喜んでいると思います。」

「そうか……………お主は死ぬなよ。死んだら妾が許さんからな。それだけは心に刻み付けておけ」

どうやら、僕のことを心配してくれていたらしい。強い意思が、彼女の優しさがその瞳から直に伝わってきた。それは嬉しいけど、一回会っただけだぞ？そこまでしてもらう程のことをした覚えがない。よく分からないけど、期待されてるのかな。父上のせいかもしれない。どんな荒唐無稽な自慢話をしたのだろうか。

「今日はアレンに話があつてな。お主ともゆっくり話あつてみたかたしの。また城を抜け出してきた。なに、クリムに会いに行くと書いた紙を父の書斎に置いといたから心配はいらん。アイリも連れてきておる」

わざわざ僕の名前を書いたんですか！変な噂が間違つてもたちませんように……………おっと、またアイリさんに気づかなかった。ローラ姫の存在感が半端ないから、つい視線が一ヶ所に集中してしまう。黙って一歩後ろで控えていたアイリさんと目が合った。

「お久しぶりです。クリーム様。ローラ様が会えるのを楽しみにしていたんですよ。ここに来るまでのご様子をお伝えしたいくら……」

「前はゆっくり話せなかったからのう！後で一緒に紅茶でも飲もうか！アレンにも話があるからクリームよ。案内を頼む！」

早口で捲し立て、ローラ姫は一人歩き出した。不味い、逆方向だ………何この指摘しづらい感じ。案内人の先を進んでどうするのか？

アイリさんはくすくすと小さく笑いながら後ろを歩いていく。

本当の姉妹みたいだ。

さて、父上はローラ姫と会ったらどんな反応するかな？ちょっとでも気が晴れてくれればいいな。

外伝 驚異のフットワーク〜ローラ姫（後書き）

ノリで書いてしまった……………まあ、たまにはいいですよね。

拙い文章ですが、お楽しみいただければ幸いです。

外伝2 女傑くターニャ・ラミレス

ターニャはうんざりと剣を降ろした。そのすぐ脇には、何度も立ち向かってきた今日の挑戦者。無惨に破れた服を着た男性の姿があった。

「無駄な努力が好きなのね」

陽光に照らされ輝く銀の髪は、幾人の男の心を奪っただろう。強き光を宿した不敵な瞳は、誰を愛しの男として映すのか。

切っ掛けは些細な、あまりにあっさりとした一言。

「私に勝てたらね」

日に何人もの男に告白され、面倒になった彼女は、二度とこんな馬鹿げた告白をしてくる男が出てこないように、そいつを完膚なきまでに叩き潰した。

そこから受難の始まり。ラスルコフ学園は7歳から15歳までが

通う、ギルバート屈指の名門校。学院には成績優秀な者のみが入学でき、22歳まで学び続ける。大半が研究者が王家の宮廷魔導士になる。

宣言したのが8歳の春。クリムと会えず、鬱憤が溜まっていたのかもしれない。今日は14歳の自信満々な腕自慢が相手だった。

「クリムの方が剣筋が鋭かったな……………はあ……………まだこっちに来てくれないのかな。お姉ちゃんは悲しい」

溜め息をついて下を向くと、気絶した男の姿が目映った。無言で視界の隅に消えるよう、蹴りあげる。何か呻き声をあげたが、ターニヤの耳を通ることはない。

「ターニヤお疲れ〜っと。おやおや、これはまた……。ニヤーちゃんに怒られるよ?」

「正当防衛よ」

「いや、説得力に欠けると言うか……………ごめんごめん!睨まないで、やめて!こっちに物騒なもの向けないで!私は弱いのだよ!あ、いや、

「弱いだよ!」

「ん…………どう違うの?」

「乙女っぽくない?」

「《反則魔法少女》略して魔女のお前が?」

「やめて! その変なあだ名であたしを呼ばないで! 親友でしょ! あ、笑ったな。女神とか戦乙女とか、かつこよくて可愛い名前を持つてるターニヤに、私の苦しみは分からないんだ!」

ターニヤを前に物怖じせずに騒ぎ立てるこの女の子は、アテル・ミースアート。赤色の髪がところどころに跳ねた癖毛に、二重の大きな目が密かな自慢のターニヤの数少ない友人だ。よく笑い、よく喋る。ターニヤのよき理解者とも言える。

「それより、まゝた黄昏てたでしょ? クリム君だっけ? ターニヤの弟君。むっふっふ、来年か。あたしが年上の魅力で誘惑しちゃおっかな!」

「死にたいの?」

「目が本気だよ！？いや、冗談だから！応援してるよ。目指せ、姉婚！新たな時代の幕開けだね！」

「別に……………そこまでは。ただずっと一緒に……………」

（可愛い！！！！ターニヤがモジモジと……………クリム君って何者！？）

アテルは滅多に見られない学園最強の親友の姿に呆気に取られながら、その想い人に興味を抱かずにはいらなかった。

（もしターニヤが夢中になるくらいの本物なら……………むふふっ狙っちゃおうかなー）

ターニヤの持つ剣先が、天へと向いた。

「って何やってるの？ちよっ！剣を構えちゃって！親友を殺す気？本気でやめて！怖い！」

「お前の考えてることくらい分かる」

「あたしも今凄い分かるよ！……………さよなら！！」

「逃がさない」

壮絶な鬼ごっこが始まった。少なくともクリムの学園生活は退屈することはないだろう。その10分後、アテルの悲鳴が学園中に響き渡った。

外伝2 女傑くターニャ・ラミレス（後書き）

地の文クリムのみに飽き始めたので、ターニャサイドストーリー書いてみました。またまたノリで、結構楽しかったです。

読んでいただき、ありがとうございました！

十九話 魔物とは

魔物にも、精霊と同じくランクがあるとジジイが教えてくれた。

まあ上級、中級、下級って感じで結構大雑把に分けてるみたいだけどね。本当に厄介なのは、魔獣や魔神と呼ばれる存在。これらはさらに上、上位一位から五位まで強さのランクで分けられ、下に魔物が続く。人間以上の知性を持ち、人語を解することが出来る。代表的なのがドラゴンだろう。魔法を操り人形に姿を変えたり、一国を燃やし尽くしたりと、間違いなく最強の種だ。さらには人と交じり、竜人と恐れられる種族もいるとか。どんな姿をしているのか、想像もつかないや。

「ラチグルってのは、ガキの肉が好物でなあ。多分すぐに殺りにくるぞ。噛みつかれたら肉を抉り取られるからな。頭が喉を一太刀で潰せよ」

「ボクは何匹か殺したことあるよ」

「ほお、流石だな。坊主も気張れよ！シルーレに負けたら、飯やらねえからな」

「それは可哀想だよ！大丈夫だよクリム。ボクの分けてあげるからね」

「ハアッハッハ！坊主も罪な奴だなあおい。」

僕は只今マラソン中。ジジイの背中にはキャンプ道具が詰まった年期の入った茶色い袋ある。サバイバルに慣れてそうだなんな。前を走る化け物は、無人島だろうが余裕で生きていけると思う。

父上は苦笑いしてたな……………僕と同じ目にあったのかも。まあ師匠に任せてある。あの人に認められたってことでもあるんだぞと、送り出してくれた……………平然と……………父上やジジイに歯向かってまで味方してくれたのはリリースだけだったなあ……………結局ジジイが押しきった。

「崖から蹴り飛ばすくらいしねえとモノになんねえんだよ」

あの一言は印象的だったなあ……………ジジイの基本理念を改めて理解した。この世界は口先だけじゃ生きていけないようだ。元営業マンのスキルは何処で生かせばいいんだろう。

「前から気になってたんだがよ。シルーレのそれ、何かの加護でもついてんのか？業物っていうより神器って方がしっくりくるんだけどよ」

「《ルフのレイピア》のこと？神器なんてボクは見たことないよ。これは……………詳しくは言えないけど、風の属性を持ってるんだ」

「お前年いくつだ？エルフは外見からじゃ年は分からないって言うけどよあ、坊主より腕はたつし、おまけにそいつを扱えるとなると……………」

答えたくないのか、シルーレはそっぽを向いて黙っている。ちょっと猫に似てた。その仕草はまだまだ子供……………

というか余裕か！ジジイもシルーレもお喋りしながら平然と走っている。勿論、僕にはそんな余裕はない。魔物を殺す、それはこの世界では必要な経験かもしれないが、やっぱり気が重い。お陰で初めて産まれ育った街を出たと言うのに……………楽しむ気にならない。ちなみに今は森の中。何でもウルドのとある村にジジイの知り合いがいるとかで、そこに泊まるらしい。生きて帰れるかどうか。

そもそもあんなやる気になれないんだよな……………と、うだうだ考えていたらジジイが足を止めた。

「お……………2匹だけか……………まあいい。お前ら、わしが見てやるから、さっさと殺ってこい」

コンビニ行ってこいって感覚で前方を指差している。そこには真っ黒なドーベルマンみたいな四足歩行の獣が……こっちを睨んでうねり声をあげていた。

「嘘だろ……………」

本当にジジイは僕を崖から蹴り飛ばしたことが判明した。

十九話 魔物とは（後書き）

シルーレは今出てるからいつかなあ……うーん……迷います。とりあえず、有りがたくも1週間！日間ランキング2〜5位を経験させてもらいました！弟の予言が的中なのが笑えます。

まだプロットの中盤にも入っていないのがもどかしいですが、此れからは不定期に、楽しく投稿していくのでよろしくお願いします。

二十話 バトル〜カストール〜クリーム

クリームは鉄の短剣に手をかけた。父から貰った馴染み深い武器。自身の無力を呪い、無心にひたすら振るい続けたその刃を鞘から抜き放つ。

だが敵に戸惑いは見られない。涎を口から垂らしながら、鋭く尖った牙を覗かせて飛びかかってきた。相手は殺すことに迷いはない。木々の葉が、ラチグルの放つ威嚇の雄叫びに震えていた。こんな小さな子供など、空腹を満たす馳走にしかみえないのだろう。

爪が！牙が！襲いかかる。

一太刀で仕留めるには、短剣を振り抜く覚悟と、タイミングを見極める勇気が必要だ。

その二つは、カストールがどんなに武器の使い方叩き込んでも、稽古を重ねさせても身に付けさせることは出来ない。

どんな優れた技量を身に付けさせようが、剣の才に恵まれようが、それらは命のやり取りの中では、あっという間に霞んでしまう。

クリムは優しすぎる。カストールにはそこが心配であった。技量も体力もつけた！苦難に負けない根性も、父以上の剣の才もある。間違はなく将来、その名を国中に轟かすであろう六歳の少年にかかる期待は、傍目からは考え付かない程大きかった。

自分に孫がいたらこんな気持ちだろうかと、何度考えたことか。嫌嫌義理で引き受けた稽古だったが、いつの間にか自分から喜んで足を運ぶようになっていた。

シルーレという良き好敵手も側にいる。優しさを乗り越えた先にあるものを、クリムに感じ取らせたい。

わざわざウルドまで行くのには、そうしたカストールの真剣な思いがあったからである。

剣を下段に構えたクリムは、大きく跳躍して襲いかかってくる相手よりも、姿勢を低く、重心を前に傾け、爪先に力を込めた。

一瞬の交叉。クリムは無心で右下からラチグルの喉を斜めに切りつけた。全身の力を入れた斬撃。避けきれずに頬は爪で挟まれ、赤い血を流していたが、拭う余裕などない。突進してくる相手の勢いを、上手く利用できた。早く止めを……と、振り返るとラチグルは勢いよく血を喉から吹き出しながら、前のめりに倒れていた。

達成感など微塵もない。あるのは自分が生きていることへの安堵。
残るは嫌な感触だけだった。

隣で、断末魔の甲高い悲鳴を上げてもう一頭の命が消えた。

流れる血を心配し、シルーレが此方に来る。

(やー……最悪だ………)

友に感謝しなくてはならない。極度の緊張から解かれたクリムの体
は、ゆっくりとシルーレに倒れこんでいった。

二十話 バトル・カストール・クリム（後書き）

初めての本編三人称。いやはや本当に文才がないなあ……

けど軽いノリで殺させるわけにも…… P V 7 0 万とユニーク 1 0 万
超えてましたー！ありがとうございます！

二十一話 飯抜きは辛い

僕は頑張ったと思う。嫌々だったが、あのラチグルという魔物対峙して、命の危険を感じると、即座に短剣に手が伸びていた。これはもう仕方ない。むしろ頑張った。傷は負ったが勝ったんだ！褒められてよくね？と思うのだが…

飯抜きにされました…

慈悲の心がないのだろうか、あの独身ムキムキマッチョは。こないたいけな子供に何たる仕打ち。

「なさけねえ奴だなあ……罰として今日の坊主の飯はねえからな」

ジジイは目が覚めると同時に背中を向けたまま僕に言い放った。どうやら気絶したのがお気に召さないようだ。シルーレは親切に僕を木陰まで運んでくれて、血が出ていた頬にポーシヨンの緑色の液体を塗り、つきつきりで面倒見てくれたというのに！ジジイには人の心がないのな！何だかめちゃくちゃ悔しかった。鞭の前に飴をくれ。鞭で打たれて鞭でぶたれて鞭で叩き付けられてきたのに、それはないだろう。

「ボクの分けてあげるからさ。一緒に食べよう！ね！」

いや、飴はあった！！横たわりながら背中だけ起こした僕を見上

げるように顔を近づけ、慰めてくれるシルーレ。肩に手をポンと置いてくれた。いい匂いが鼻孔をくすぐる。そよ風がシルーレの髪を宙になびかせていた。

「ありがとうシルーレ！」

僕はもう満面の笑み。もうジジイなんてどうでもいい！シルーレがいるじゃないか。

「……うん……」

蚊の泣くような声を出したかと思った。たら俯いてしまった。若干耳が朱いような？触ってみたいが、ちよつと気が引ける。シルーレって怒ると恐そうなんだよね。今は友達だけど、最初の出会いとか強烈すぎる。よくもまあここまで……泣ける！

「ぼけつとすんな坊主！休憩は終りだ。ちゃっちゃと行くぞ」

感傷に浸ることすら許されんのか。いつかジジイは倒す。僕はジジイに殺意を抱きながらそう誓っておいた。

またまた地獄のマラソンの始まった。

ラチグル5匹とグリズリー的な大熊が襲ってきたときは、死んだと思ったな……シジイの持つ斧が血に染まって片付いた……熊の助は一振りで、ラチグルは右腕一本で粉碎した……

夜は本当にご飯が抜きでした。シルーレには悪かったけど、少し貰ってさつさと寝た。シジイが寝ずに見張りをしてくれたのにはちょっと感謝。

次の日の昼。シルーレは3匹、僕は2匹殺した。昨日よりはマシだったけど、まだまだ……

「坊主は来年にやあ7歳だろ？魔法の他にも、グランドアーム インフェルノ魔闘鎧や魔戦技をそろそろやらせるか」

もうすぐ村というところで、嬉しそうに話すシジイ。良いことでもあったのか？これからの稽古の話になんて興味はないんだけど。

何故この世界では7歳から学校に入学するのか。諸々あるが、一番の理由は体内の魔力が最高値に達する頃だからだ。魔力がどうやって生まれているのか、血に宿っているのか、魂に生まれながらに備わっているのかは分からない。体の成長と共に7歳頃まで増えるということはあるが、詳しくは説明されていない。

150年程前、人の魔力はどこに宿っているのかを知るため、死刑囚を細切れにして調べた研究者、血に宿ると信じて、己の魔力を増やすために高名な魔導士を殺し血をすすったという殺人鬼がいたらしい。

僕は他の人よりも魔力値が高いと母上が言っていた。まあ母上に教わった治癒魔法は、殆ど精霊魔法と言われる分野に近いからなあ。普段の光ちゃんからは信じられないが、高位精霊の力は本物だ。光ちゃんがいないと、骨折を一瞬で治すなんて不可能なのだ！

母上は光ちゃんパワーで、領内の患者よ、どんとこい！って勢い何人で治してたな。多いときは3けた近く。光ちゃんがいればこそその芸当だ。

そして走ることに20分程。

「あ、見えてきた」

ようやく着いた！　と思っただけ

「いや、わしの知り合いはここにやあいねえ。変わりもんだからな
どうやら違つようだ。類は友をつて奴だね！

「じゃあどこに？」

「あそこだ」

ジジイが指差したのは、村を見下ろす山の頂上付近。どんな変わり者だよ……………多分仙人クラスの変人だ。

二十一話 飯抜きは辛い（後書き）

へんてこな新キャラですので、よろしくお願いします！

二十二話 白狐

「絶対殺す気だ！　たく、キャンプにだって行ったことなかったのに」

只今ジジイとシルーレとは別行動中。きっかけはまたまたジジイの非道な命令だ。

「一人で行け。わしは村長に用がある。シルーレも、昨日は見逃したが今日は許さねえ。一緒に来な。いいか、こっからは坊主一人でアイツの家に行け。ほれ、地図とコンパス。走れば3時間くらいだろ。わしらに抜かれたら罰として……………ま、帰りの荷物もちで許してやるか」

「無理！！師匠！絶対無理！魔物が出たら？」

あまりの宣告に、ジジイに飛びかからんばかりに叫んだ。ちなみに普段は父上に習って師匠と呼んでるのだ。目上の人をジジイ呼ばわりなんて、例え殺意を抱いていても目の前じゃ出来ん。リアルに半殺しにされそうだし。

「ああ？自分で何とかしろ。当たり前だろ。運がよければ会わねえよ。さっさと行け」

「僕は方向音痴なんだ！」

遭難という言葉が頭を過る。地図があるうが、コンパスがあるうが、カーナビレベルの全自動道案内機がないと不安だ。地元で普通に道に迷える僕にとって、結構死活問題。冒険者には向いてないかもと今更だと思った。

「知らんわい。その為の地図とコンパスだろうが。じゃあわしは行くからな」

正論だけに、言葉につまる。何とかして思い止まらせたいが……そんな僕を残してさっさと行こうとするジジイ。だが、僕には友がいた！

「カストール……クリム一人じゃ危ないよ。僕も一緒に行く！」

何て優しいんだろう……胸が熱くなる。僕の慌てる様在必死だったから、同情してくれたのだろうか。兎も角、これで一安心。

「甘やかすな。ほれ、同じこといわせんな」

ジジイはシルーレの襟首を掴んだかと思うと、ぐわつと軽々と持ち上げた。シルーレが悲鳴と抗議の叫び声をいくらあげようとお構い無し。地面を揺らしながら去っていった。

「……………」

声が出なかった……………一瞬安堵しただけに、天国から地獄って感じだ。

今度は天から蹴り落としゃがった！！

葛藤と現実逃避すること数分。仕方なく地図を目に焼き付けて行軍を開始した。

道なき道をひたすら走る。よし、方角は東北に。空は晴れ。魔物なし。何とか無事につけてくれよと祈りながら走る。

と……………嫌な悪寒。咄嗟に振り返ると……………白狐がこっちを見てた。

やー……………綺麗だ。神々しくすらある。耳から尻尾まで雪のような白模様。時折耳をピクピク動かしながら、気品ある態度で僕を観察している。野生の狐なんて初めてみた。

しかし僕は忙しい。普段ならたつぷりと眺めたいところだが、罰ゲームはごめんだ。襲ってこないし別に無視していいかと思い、特に気にせず行軍を再開した。

『村の者じゃないね坊や。迷子かい？』

誰かが人をからかうような楽しげな口調で頭に直接話しかけてきた。女性のように高いが、妙に渋みのある重々しい声色。初めての経験に戸惑う僕。

足を止め、素早く辺りを見渡すが人の姿はない。上からでも下からでもない。ただ言葉だけが直接頭に響いてくる。

……人の声じゃない？

『はて、可愛らしい坊やだが、嫌な匂いがするな。私と死合いをしたあの野卑な人間の匂いが。もしかして、坊やはあいつの関係者かな？』

ひらりと目の前に何かが降り立った。真っ白なその狐は、一足で僕を飛び越し、今度は間近で見つめてきた。

こいつが喋ってるのか？ 只の白狐じゃない……もしかして魔獣！？

『混乱しとるようだ。ふう、まずは自己紹介といこうか。人間の坊や。私はお前たちの言うところの魔獣・第四位・白炎のキリコという。』

そう言うてにやっと顔を崩した。狐が笑った！ と呑気に構えてる場合ではない。目の前のこいつは前世でいう妖怪に近い。しかも魔獣！ジジイの知り合いってもしかやこの妖怪さんか？ だとしたら本気で恨むからな！

『坊やの名前は何か？正直に言えば、食べないであげなくもないよ』

「どっちだよ！」

どこまでも愉快そうな目の前の狐に、思わず突っ込む僕。明日まで命はあるだろうか？

一方その頃、カストールはようやく観念したシルーレを引き連れ、村長宅に向かっていた。

「酷いよ！鬼！悪魔！人でなし！クリームが魔物に襲われたらどうするのさ！」

大層ご立腹なシルーレは、さすがに倍以上の巨漢に殴りかかりはしないが、ひたすら文句をぶつけていた。

「うるせえな。あいつは子供は食わねえから大丈夫だ。それに宿を村長に借りなきゃ泊まるとこねえぞ。こんな何もない田舎にくるやつは滅多にいねえからな」

「食べない？え？知り合いじゃないの？泊まるのはそこって……」

「わしはあいつが人間だなんて言つとらんぞ。何でも人の山小屋を占領しとるらしいが、そんな辺鄙なとこに泊まる気なんてさらさらないわ」

「じゃあ、山に住んでるのって……………」

「魔獣じゃ。何度が殺しあったこともある。といつても変なやつでな。人間に興味があるようで、この山に住み着いてる。なに、害はない。この村の守護魔獣ってとこか」

「そんな！何でクリムを一人で行かせたの？」

「……………まあ、長年の勘だ。わしが行くと殺し合いになるかもしれないし、お前も一緒にいくとクリムの成長にはならんと思つてな」

「何だよ勘つて！今すぐ助けに！」

「いいから黙つてついてこい」

問答無用で今度も襟首を捕まれるシルーレ。手足をばたつかせるが、カストールには大した重荷にはならないようだ。いくら暴れようがお手のもの。足をどんどん進めていく。

（あの山にはキリコしかいねえ。雑魚の魔物はまず近寄らねえからな。さてさて、この出会いがどう転ぶか楽しみだぜ）

今回の修行の目的は二つ。

一つはクリムに魔物を殺させること。つまりは命のやり取りの経験を積ませること。

二つ目は偶然思い出したキリコの存在。並みの魔導士では相手にならない規格外の魔獣の存在をクリムに直に知らせること。それはこれから魔法を学ぶクリムにとって大きな糧になる……ハズだとカストールは考えていた。二つ目の方は自身の勘が8割だが。

（さつさと村長んといいかねえと……にしても、これまで一人も村の奴を見てねえ。何か嫌な感じだな）

嫌な予感に急かされながら、少々喚くシルーレにうんざりしつつ、村の中心地を目指すのであった。

二十二話 白狐（後書き）

二十三話 お喋り魔獣

『クリームというのか。蒼い髪にその瞳は綺麗なものだ。顔つきも惹かれるものがある。魔獣の私が思うくらいなんだから、さぞ人間の女にモテるだろう。どうだ？』

「さあ？ 自分ではなんとも」

『おや、将来は女たらしになるかもしれないね。私の言葉を覚えておくといい。それで、坊やの師がカストールなんだね？』

「……一応そうだよ」

『クフフ、一応ときたか。あまり好かれとらんね。いや、当たり前だ。あんな野蛮な奴をよく師にすることが出来るもんだ。その一点に関してはさすがの私も頭が上がらないよ。ここにやられた理由もまあ分かる。食べはしないから、今日は泊まっていくといい。私が人間に学んだもので、トップ５……いや３だな。調味料や道具を使った料理と言うのはなかなかのものだ。坊やは甘味は好きかな？ 私は好物だね。あれを発明したものは実は魔神なんじゃないかと疑っているんだ。だってそうだろ。あんなに私の心を………』

よく喋るなこの妖怪！

さつきからずっとこんな調子。僕は頷くか、曖昧な返事をしながら、このキリコの後をひたすら追いかけている。魔物も見当たらず、どうやら寢床も確保できそうだ。それはいいんだが……前を歩くキリコがめっさ話しかけてくる。魔獣というのはお喋りなのかな？

『坊やの魔力量は人間にしてはなかなかだね。変わった波長を感じる。いや、そこなんだよ。長年人間を観察してきたが、坊やのような魔力波長は見たことがないんだ。火のような雷のような、イマイチ掴めない。これは私にとって結構な出来事だね。最近は人間の本というものもある分は読みきったので暇だったんだ。そこで坊やが来た。今まで感じたことのない波長を持ってね。もうしばらく様子を観察してたかったがもうダメだ。私の好奇心を抑えるのは無理だったよ。それで坊や。何の魔法が得意なのかな？ 恐らく光を扱うものだと思うんだけど、波長が火に変わったり雷に変わったりで一瞬一瞬変化が見えるんだよ。何かの加護を受けてるのかな？ 魔力の波長と色は、人間は一つしか持っていないハズなんだ。もしくは特異体質かな？ いや、興味深い。私の好きな甘味の本が、突然空から落ちてきたかのようにだ』

もう面倒くさくなってきた。緊張がゆるゆる溶けていく。まさか白狐に言葉で圧倒されるとは。しかも魔力波長って何だ？ 魔獣言語か？ 魔力には特有の色があるらしいとは本で読んだことあるが、さて、どう答えたらいいか。

「そうだね」

まあ、流しといた。途中からこっちの言葉聞いてないっぽいし。こいつは友達いないだろうな。何だか可哀想。

『ん？ 今無礼なこと考えなかったかい。また波長が変わった。坊やの気持ちが変わると連動するのかもしれない。それはそうと、私は人間とは次元を異にした高位な存在なんだ。とりあえず、謝りたまえ』

「……………ごめん」

『許そう。坊やぐらいの子供が無礼なことを言おうが考えようが気にはしないさ。ほら、彼処が私の家だよ。見た目はボロだが、中は整理されている。本は私の宝だからね。もし汚したら容赦なく追出すから心に留めておきたまえ』

いや、これは、凄い、面倒くさい！嘘だし、気にしないとか。めちやくちや敏感じゃん。謝れとか言った後に大物ぶられても困る。どうやら哀れむと気持ちがバレるらしい。思考を放棄して、言われるがままにキリコ宅に入ってみた。

「キリコ……………」

『お、私を早々に呼び捨てとは肝が座っている。まあ坊やは特別だ。これは光栄な……』

四本足の獣がどうやって本を読むのかとか、料理するのかとか今はどうでもいい。

「汚すぎ！どこが整理されてるって？ 本は床に散らばってるし、何か変な臭いするよ！まずは掃除！これじゃ寝られないって……あのさ、キリコってお風呂はどうしてるの？」

『川が近くに』

「そこは魔獣か！……疲れてるんだけど、仕方ないか。まずは薪に、ドラム缶みたいなものは……あるはずないか。とりあえず、台所の掃除しないと」

目をぱちくりしている駄目魔獣を放っておいて、今日は厄日だと思いながらいそいそと台所に向かうのだった。

二十三話 お喋り魔獣（後書き）

読んでいただきありがとうございました！

二十四話 愉快的友人キリコ

どうやら、もともとあった山小屋を改築して住んでいるらしい。よくもまあ持ち込んだもんだと感心するほどの本が散乱していた。台所は一応、それらしき設備を整えてある。自分で作った？ わけないか。僕の中では駄目魔獣という評価が定着してしまっている。大方、誰か村人にでも手伝ってもらったんだろう。想像できないが、それ以外考えられない。素人目にも、増築したような建築の跡があるし。

『坊や。また何か……』

無視した。もう謝るのも面倒くさい。臭う生ゴミをまとめて外に埋め、箒や雑巾らしきものでせっせと片付ける。

『ほほう、坊や。私を無視するとは。いいかね。私がその気になれば――』

そんなの知らない。次は本だ。埃を被っているものが多くあるので、外で埃を落とし、全く機能を果たしていない本棚に入れていく。無駄に立派なんだけど……恐らく村人以下略。

『おい、坊や。キレイにしてくれるのはいいが、口は動くだろう？ 手はそのままでもいいから、少しはこつちを――』

おっと、雑巾が汚れてしまった。キレイな水が必要だ。流石に必要な飲み水は台所の容器の中にあったが、如何せん少なすぎる。来るときに川は見つけといたからな。さっさと汲んでくるか。

『うわー！この女たらし坊やめ！』

飛び蹴りを後頭部に思いつきりもらった。だが、飛び蹴り？ はて狐の足にしては大きすぎないか？ と思った僕は正しかった。

両手を腰に当て、こつちをしかめっ面で睨む若い女性の姿があった。耳はお約束のように白狐の時のまま、ピコピコ動き、髪は雪のような純白、だが瞳は魔獣を思わせるかのように紅い。鼻は高く、すつきりとした印象で、唇は小さく可愛らしかった。そして何より肌がめちやくちや白い。胸も大きく、恐らくリスより……って、何故裸？ スタイル抜群の美人の裸を間近で見ることになるとは。現実離れた美しさだったので、つい見とれてしまった。

『クフフ。私の美貌の前に見とれているな？ 何、私の膨大な魔力と類い希な知識が備わればこの程度……』

真っ裸で偉そうに説明されても……急速に冷静さを取り戻していく僕。中身は変わらないようで、少し安心した。さて、だから妙に小綺麗な服が隅っこに重なってあったのか。外套らしき体を包む服を

キリコに投げといた。よし、早速水を汲みに行くでしょう。水浴びもしたいし。

『坊や……行かせないぞ！まずは私を蔑ろにしたこと、そして無視したこと、私の裸を見て何も言わなかったことを詫びろお！』

しゅわつと、僕に飛びかってくるキリコ。体格ではまだまだ勝てないが、生憎ジジイに無手でも戦えるよう仕込まれている。自然と避けていた。足払いは自粛したのだが、本に躓いて転ぶキリコ。

『……………』

僕を恨めしそうに睨んでくる。いや、僕は悪くないぞ？ 睨むなら躓いた本にしてくれ。

「えっと、キリコ。そうだ！ キリコのご飯を食べてみたいな」

誤魔化すためとはいえ、少し苦しいか……と思ったが、

『…………坊やが謝ってくれたら作らなくもない』

結構簡単な魔獣のようだ。耳がせわしくピコピコ動いてるのがその証拠だろう。

「ごめんなさい」

『よし、許す！ さて私の美味しい料理を期待して待つといい』

嬉しそうに台所に向かうキリコ。大人っぽい一面もあるが、何だか子供のような。ひらひらと光ちゃんが脳裏に浮かんだ。

「じゃあちよつと川にいつてくるから！ それと、服はちゃんと着てね」

『おや、坊やはこっちの方が嬉しいのではないか？ 欲情するにはまだ年が……』

「恥じらいなく言われてもね」

『成る程。坊やの好みは理解した。じゃあ適当に着ておくか。鬱陶しいからあまり好きじゃないんだが』

ぶつぶつ文句を言いながら服を漁り始める。そんなキリコに背を向け、僕は桶を片手に川へと歩いていった。愉快的な友達が出来たことに、若干心を踊らせながら。

二十五話 赤月の群狼

カストールとシルーレは村長宅に行き着いた。初めてきた旅人もすぐここが村一番の権力者の家だと分かるだろう。木造のしっかりした造りに、少し離れて円錐の建物がある。恐らく村の集会所として使われているのだろうが、妙に暗い雰囲気の中から発せられていた。

「何だか辛気くさいね」

シルーレがぼつりと呟く。明らかに多くの人が中にいるが、活気が伝わってこず、ただただ不気味な空気を漂わせていた。

「嫌な感じだ。つたく」

カストールもこの空気に当てられ気分を害したようだ。肩を怒らせながら中へと続く扉を開けた。

「おい、ヨゼ！何だってんだ一体！」

怒鳴り声をあげる突然の来訪者に、一斉に視線が集まった。大体30人程の男たちが胡座を組んで座っていたが、皆驚いているようだ。大部分のものは既にカストールの剣幕に圧されている。

「おお、カストール！よく来たよく来た！お前が依頼を受けてくれたのか？」

その中で一人だけ辛うじて平静を保ち、手をあげてカストールを迎え入れる人物がいた。彼の名はヨゼ・ラストル。齢60を過ぎているが、眼光は衰えず、体も頑健な男だ。だが、少々やつれているように目が窪んでいる。顔色も悪い。

「何だ？　わしは依頼なんて知らん」

「そうか……ふむ、そう言えば依頼を出すためにアスを村から出したのは昨日だったか。まだギルドに受理されていないかもしれない……偶然か、いや、これは喜ばしいことだ。お前の腕は知っている。頼まれてはくれんか？」

「わしはここにやることがあつてきた。ギルドに出したなら待ってりゃその内誰かくるだろ」

「いや……だが、来たとしても……カストールも知っているだろう？ 盗賊・赤月の群浪の悪名を。村に少し前、赤髪の男が一人でやってきて……」

意外なことに、カストールよりも早くその赤月の群浪という単語に反応したのはシルーレだった。居心地悪そうにカストールの後ろに佇んでいたのだが、即座に前に出てヨゼに掴みかかる。

「今赤月の群浪って言った！？それに赤髪とも！」

「落ちて着けシルーレ。ほれ、ヨゼもエルフは珍しいだろうが話は後だ。続きを」

カストールに右腕で強引に引き剥がされたシルーレは、興奮を隠しきれずに頬を赤く染めながら、ヨゼを促すように見つめていた。

「……………キリコの居場所を教えろと言う。わしの娘があやつのお陰で助けられたことがあってな。あいつには村の者も多かれ少なかれ感謝している。断ったんだが、5日待つから居場所を教えろと、さもなければ皆殺しにするってきおった。どんな手段を使ったのか知らんが魔物もこの近くにどんどん増えてきてな……………」

「あいつが殺られるかよ。しぶとさだったらわしが認めてやる。居場所なんて教えてやればよかったんじゃないか？」

「その赤髪の男の……笑みがな、不気味で仕方なかったんじゃない。長く生きてきたが、あんな邪悪なものは……それに、いくらキリコが強かろうと恩を村人全員が受けている。それを売るような真似は、人として出来ん」

「相変わらず堅い頭してるわい。だから、この死人のような空気が漂ってたのか……ったく、んでいつ来るんだ？ その男は？」

「後2日じゃな。村でも意見が割れている。キリコはここから逃がすべきだが、そうしたらわしらは……」

「いや、ヨゼ……分かってんだろ？ 赤月の群狼の噂が事実なら、5日なんて長い日にち設けたのは苦しむ様が見たいからだ。どっちにしる皆殺しはさけられんだろ」

途端にざわざわと男たちが騒ぎ始める。戦うべきだ！今すぐ逃げる

べきだ！と喚く者が数人出てきた。ヨゼが沈痛な顔をして、何とか沈めようとするが一旦揺れた感情の波はそうそう収まらない。

その中で、シルーレが静かにヨゼに問いかける。

「ヨゼさん。その赤髪って、こつ目に傷がなかった？」

自身の右目を指差し、縦になぞる。ヨゼは強く頷いた。

「忘れようがないさ」

その言葉を聞いた瞬間、シルーレの目は鋭い眼光を放ち、ヨゼを一歩下からせるほどの威圧を含んでいた。

「ボクは運がいい。やっと、やっと」

一人呟くシルーレの姿は、とても子供とは思えない。ヨゼは背中が

じわりと湿るのを感じていた。

「うるせええ！お前ら！」

ビクッと、男たち全員が反応し、押し黙る。

「とりあえず酒だ！さっさと持ってこい！血染めの戦鬼の名を知ってる奴あ早く支度しろ！」

先の対戦において、ギルバートの砦と称された二人の男がいた。一人は当代ギルバート王、もう一人がこの男、血染めの戦鬼、カストール・グランである。

戸惑うのも一瞬、我先にと村にある酒を求めて男たちは全員去っていった。

「本当に面倒なことになったもんだわい」

そう呟くカストールの顔は、
久々に沸き上がる血の猛りに静かに笑
みを漏らしていた。

二十六話 ストーカー出現

意外や意外、キリコの料理は美味しかった。正直、あんまり期待してなかっただけに、ちよつと感動している。キリコ！ やれば出来るじゃないか！

『坊や……いや、もういい。どうだね。私の20年の成果は。初めて料理というものを知って、研究を重ねてきたのだ。手を使わないと作れないからね。その為に人の姿まで成れるようになったのだよ』

多少呆れ気味に答えるキリコ。よく分からないこだわりがあるのか、姿勢正しくナイフとフォークを使う様は随分と上品だった。どこかの貴族令嬢で通じるかもしれない。今キリコは、白と紺のブラウスにシワだらけのスカートをはいている。下が残念。あまり着ていないらしいが、普段はどうしてるのだろうか？ 考えようにも、答えは一つだが。バカなのか天才なのかよく分からない魔獣だ。

「そう言えば、師匠と死合いしたって言ってたけど何で？」

これは気になっていた。丁度掃除も一区切り着いたので、聞いてみる。ちなみに掃除中、キリコは戦力にならず、口ばかり動かしていた。

『ああ、人間に興味を持ち出した頃でな。人里に姿を変えずに潜り込んで、本を強奪していたのだ。それで討伐の依頼が出てしまったようで、それを受けたのがカストールだ』

食後の水を美味しそうに飲みながらキリコは答えた。

「よく無事だったね」

『普通は逆なんだかな。あれは化物だと私も思うぞ。よくも人でありながらあそこまで……私の白炎があまり効かなかったのには、シヨックだったな。しかし負けたわけではない。勝敗は引き分けた』

「本当に？ まあいいけど。白炎って何？」

『疑うのか？ 私が負けるわけないだろう。白炎というのは、私のオリジナルだな。私の氷の波長に、炎の魔力を足したものだ。触れれば一瞬で燃え上がるように凍り崩れ落ちる。炎の性質に氷の属性をつけた、それはもう強力な魔法だ！』

「何で師匠には効かなかったの？」

『嫌なことを思い出させてくれる……魔力の渦が溢れるのが見えた。私に言えるのはそれくらいか』

どうやらあまり話したくないらしい。しかし、本当にジジイは何者だ？ 倒せる日はくるのだろうか。

『今度はこつちが質問したい。私が見たところ、坊やは8……いや9かそれ以上の波長と色を持っている。私でさえ4つしか持たないのだ。坊やもカーストールのことを言えないかも知れないね』

「どういうこと？」

『まあ、私も聞いたことがないからはつきりとは言えないが、坊やに使えない魔法はないだろうね。全ての魔法と相性がいい。今の坊やの色は白で波長は光だが、これが他の魔法にも応用出来る……といったところか。魔法に自分と相性があることは知っているだろうか？ 不安定だから訓練が必要だとは思うがね。身に何か覚えはないかい？ 坊やが只の人とは思えないのだよ』

それは転生が原因か？ 都合のいい能力なんてこれっぽっちも期待してなかったから悪い気はしないが、波長やら色やらよく分からない。確証もないし、今は黙っておいた方がいいか。

「……さあ？悪いけど身に覚えはないや」

『……そうか。まあ、この話は追々としていこうか。ところで、坊やは誰と暮らしているのかな？』

「父上とクレハとシルーレとリリスと一応光ちゃんとメイドたちコウくんたちと屋敷で暮らしてる」

キリコの紅い目が見開かれ、口元は大きく開いている。感情表現が豊かなのはまあいいが、何だ？ いい予感がしない。

『クフフ、カストールの名がなくて安心したよ。私はあいつと暮らすなんて、堪えられないからね。坊やの家はちゃんと台所はあるかな？ 私としては……』

「ん？ ごめん、今なんて？ 暮らす？」

『話を最後まで聞きたまえ。坊やの家に行くと言ってるんだ。ここも飽きてきたし、坊やが来たのも面白い縁だ。私は偶然というものは信じてないからね。さしあたっての問題は、ここにある本をどうするかだ。何かいい案はないかな？』

「言うてねえ！ これは不味い。一番どうでもいいことを一番に持ってくる辺りがキリコらしい。こいつ、本気だ！ 本気で僕についてくる気だ。」

「ない！ 無理だつて。ラミレス家に魔獣が住み着いてるとか、変な噂がたつかもしれないじゃないか」

『……何と！ じゃあ坊やは、私にここに留まれと、一人寂しく死んでいけというのかな？ …一夜を過ごした仲だというのに、あまりにつれないじゃないか』

「いや、まだ泊まってもいいし。やっと僕が寝るスペースが確保出来ただけだ」

調子のいいこというな！ どうかの小説から仕入れたな。よよよ、と顔を両手で隠して泣く仕草をする辺りが、ものすごく芝居臭い。

『どっちにしる変わらんよ坊や。屋敷に人間の姿で現れて、あることないこと問い詰められるのと、今ここで私を連れていくと決めるのは、迷う余地はないと思うがね』

演技か効かないと見るや、脅しをかけてくるとは……だがバカめ！

「……六歳にそんな脅しをかけても無駄だって」

前世の頃なら分からないが、こんなちびっこにそんな脅しは無効！

『クフフ、何を言われようと付いていくつもりだ。いい加減、覚悟を決めるといい。文句はカストールにでもいうんだね』

開き直られた……目の前の白狐は本気でやるだろう。ストーカーか！？ 勝ち誇った顔が腹立たしいが……ま、ジジイに責任取って貰うとするか。

「はあ……それジジイにも言つといて」

『ジジイ！クフフ、フフ、その通りだね。いや、坊やは正しいさ。面白いね。それでだ！坊やには空間魔法を取得してもらいたいと思っっているんだよ私は。そうすれば本を持ち運べるだろ？』

「空間魔法？聞いたことないけど？」

初耳だ。地、水、火、風の基礎魔法に氷、雷、光、闇の扱いが難しく才能が要求される高位魔法なら知っているが、空間と言った抽象的なものに干渉する魔法なんて聞いたこともない。

『クフフ、今では古代魔法ロストマジックの一つさ。何せ使い手が少なすぎてね。波長と色が特殊なのさ。だが、坊やになら出来るだろう。丁度それに関する魔法は私の書物の中にある。ものの試しにやってみるといい』

「白炎も使えたりする？」

『坊やなら……だが、これは私が編み出した無詠唱の魔法だからね。私のように膨大な魔力があれば別だが、坊やの場合、威力は期待しない方がいい。無詠唱はそれだけ難しいんだ。強い意思とイメージで世界に働きかける。人間で無詠唱魔法が使えるなら、間違いなくそいつは一流さ』

なるほど。いつか治癒魔法も無詠唱で使いたいもんだな。何だか面白くなってきた！ 古代魔法ロストマジックに関する書物なんて国宝ものだと思うんだが、キリコはどこを急襲したのだろうか？

実は大物？

『あれ……どこにやったかなあ。こら、坊やも一緒に探すんだ』

キリコはいつの間にか四つん這いになって、本をバサバサ散らかしながら探していた。まだ本棚に収まっていない書物からと言うことは、埃に埋まつてるかも。ため息を吐き、僕は真夜中近くまで奮闘することになった。

二十六話 ストーカー出現（後書き）

キリコを書くのが楽しい！！！！なので一気に投稿しちゃいました。

もともと会話もあまりなく、クリムの自己決裁の感想とかくくしかじかって言葉だけでやっていこうと思ったんですが……そろそろ携帯で書くことに限界を感じます。

それを弟に言ったら、小説消せば？と言われました！全く、酷い奴です。

これが終わって、学園にいつて、狙われて、巻き込まれて、またまた変な奴を書くまで頑張ります。

それでは！

二十七話 一日の始まり

朝日が山の間からゆつくりと昇る。涼しい朝の空気と相まって、赤い太陽はいつもよりも輝いて見えた。

僕は今、山小屋……じゃなかった、キリコ屋敷から抜け出し、昇る朝日を眺めている。昨日は本当に大変だった。

「よくこんな山小屋で暮らすよな」

と、ふと思ったことを本を探しながらキリコに言ったら――

『今聞き捨てならないことを坊やは言ったね！ 山小屋とは失敬な。この私が住んでいるのだ。建物の真価は、誰が住むかによって変わるとは思わないかね？ そうだろう。今のこのキリコ屋敷がいい例だ。私のような高位の存在が住むことによって、小汚い人間の住処でしかなかったこの小屋が、ここまでの輝――』

相変わらず面倒くさいやつである。またもや僕に掴み掛らんばかりに熱弁をふるってきた。キリコ屋敷だろうが、ごみ屋敷だろうがどうでもいい僕にとつては、ただうつつとうしいだけである。そもそも会話があまり成立しないのだ。あいつは勝手に人に質問しといて勝手に答えるから。

大体下着もはいていないくせにさ！ 本当に目のやり場に凄く困った。主に本探しの最中。四つんばいになってあっちこっち動き回るから。そんな中、それでも僕はとうとう見つけたのだ！ 埃をか

ぶった古めかしい魔道書を！　そしたらキリコも嬉しかったようで、尻尾を出して歓喜の歓声をあげた。そのせいでスカートが思い切りめくれて、しかも飛び上がるもんだから、僕はうつむくしかない。その瞬間、何をとち狂ったのか、喜びのまま僕に抱き着いてくるキリコ。当然支えきれずに、思い切り頭を床にぶつけてしまった。胸の感触やらがそのまま布越しに伝わってくるし、ちゃっかり僕をクッションにしたキリコはそのまま僕を離さないで、何が何やらわからなかった。

ようやく引きはがして、よし寝るか！　と奇跡的に3枚あった毛布を引っ張り出して、寝ようとしたのだが、それからがまた大変だった。

『クフフ、そうだね。どれ、一緒に寝てあげよう。何、気にしないでいいさ。既成事実というものを作っておいたほうが何かと……』

蹴っ飛ばしておいた。いや、動物虐待とか、女性にそれはないとか言わないでほしい。僕のキャパが限界を迎えていたのだ。よき達成感を感じたまま安らかに眠らせてほしいのに、まだまだ元気すぎるキリコ。もう日は落ちていたので、これまた奇跡的にあつた蠟燭に火を灯しておいた。ほのかな明かりが周囲を照らしてくれる。修学旅行の子供のようなテンションはここから来ているのかもしれない。初めて友達がお泊りに来てくれた！　てな感じで。

『こら坊や！　いきなり何をするか！　人間の男にとって、これは夢のような状況ではないのか？　うら若き美人と一つ屋根の下。』

据え膳食わねばともいうではないか』

「お前は知識はいいから常識を学べ！　いろんな要らない知識がありすぎる。六歳って言ってるだろ！　僕はもう疲れてるんだから、さっさと寝かしてくれ！」

僕は毛布を頭からかぶった。これなら変なことしてこないだろう。途端に今日一日の蓄積した疲労が襲ってくる。

『つまらん。いや、どちらかというと寂しいな坊や……まてよ、これが倦怠期というやつではないか？　コレット夫人があまりの寂しさに自殺を考えたという……』

コレット夫人って誰だよ？　こいつの無駄な知識の根源を垣間見た気がした。まあ変な世界に行ったまま帰ってこないのはいいけど。頼むから僕が寝るまでは大人しくしていてくれ……そういえば、結局ジジイもシルーレも来なかったな。これはジジイに文句言って……とぼんやりと考えながら、意識は静かに夜の闇へと溶けていった。

太陽を正面に、大きく伸びをした。体の節々が痛むが、少しスッキリする。

昨日は本当に……疲れた一日だった。今日は出来るだけ穏やかな日

であつてほしい。起きたら人間の姿のままキリコが僕の毛布のなかにいたのだが、これは不吉の前兆じゃないよな？ ラミレス家に帰らない限り、安息はない気がする。

『おはよう坊や。昨日はよく眠れたかな？ まったく私を放つて勝手に外に出るとは。やさしく起こしてくれるものではないのか？』

「おはようキリコ。いつそこに？ なんだかどつと疲れるんだけど、当たり前のように、隣にいるキリコ。朝日に目を細めていたが、口は健在。朝から元気そうである。」

『クフフ。今日も愉快な一日になりそうだ』

「一二日連続厄日はごめんだよ」

『照れるなよ坊や。自分に正直に生きないとこれからの人生損してしまうよ？』

「照れる要素はひとつかけらもない！」

『クフ、そうかな？』

笑いながら顔を近づけてくる。両手でそつと僕の頬をつつみ、瞼を閉じ――させるか！強引に頬を引っ張ってやった。

『むう』

キリコは不満そうにその紅い目を向けてくる。いや、不満そうな顔される意味が分からない。僕は被害者だろ？とりあえず睨み返しといた。

『ま、坊やは坊やだから仕方ないか。甘美な口づけというものをしてみたかったのだが』

「ほかの人をお願いします」

『だから照れないほうが――』

「そんなに口づけがしたいなら、師匠を紹介してあげるから！　そういえば師匠は独身だよ！」

『むが！？』

師匠が頭に思い浮かんだのかな？　口を押えながら倒れこむように膝を地面につけていた。

『坊や……私を殺す気かい？　あいつの野卑な唇が目の前に浮かんできた……いくら私でも……さすがに……』

これは面白い！ 初めてキリコの弱点を見つけてしまった！ しばらくこれだからかってやろうかな。
はてさて、今日はどうなることやら。 とりあえず、村に行ってみようか。

二十七話 一日の始まり（後書き）

やばい、キリコシリーズが長すぎる……でもクリムとキリコの絡み
って書きやすいんですね……キリコが勝手にしゃべってくれるし。

ヒロインでもなんでもないチヨイ役としての出番予定だったキリコ
は、今後どうなるのか？ 実はプロットにまったくいなかったキャラ
に翻弄され中ですが、まあ見守ってやってください。次は赤月の
群浪がいよいよ。またまた新キャラ登場です。

二十八話 竜人

「おい！　なんであんな辺鄙な村一つに5日もかけねえといけな
いんだ！　さつさとこんなねぐらから出ていきてえんだよ俺は。な
あ、今から俺が村の連中を皆殺しにしてくつからよ。いいだろ？
お前だつてこんな何もねえところんざりだろうが。あのいかれたメ
ツカに何言われたかしらねえけどよ。おい、頼むぜ。気が変になる
昨日の夜なんてよお、思わず一人で殺りに行こうとしちまったよ。
見ろ！　手が震えてやがる。俺の気が長くねえこと知ってたんだろ？」

怒鳴りながら机を両手でバンバンと感情のままに叩く男がいた。
桑色のシャツからは逞しい腕を覗かせており、異様に大きな眼球が
血走っている。その特異な鷲鼻と一緒に詰め寄ったりでもしたら、
相手はたまったものではないだろう。カストールに劣らぬ巨躯であ
る彼は、全身の熱を持て余していた。何かを常にしないと自分を抑
えきれない性分なのだ。この単細胞な男には、現状が満足できな
かった。

（うるせ……）

うつとおしそうなげんりした表情で、そんな彼を平然と眺める男
がいた。黒がかった赤い髪に、右目には縦に大きな傷。椅子に座り
ながら、足を散々に揺らされている机に預け、後ろに手を組んでい
た。

「聞いてんのかよ！　おいルクス！」

「聞いてるぞー。それはメツカに言え。今日か明日にはこっちに

くるだろ。そもそも、お前にはこいつは向かないんだよな。だから待ってろって言ったのによ。魔道具の運用試験も兼ねてんだから、毎日毎日俺んところにくんなよ。こっちは魔力使って大変なんだぞ？ 暇なお前と違ってな」

最後の言葉は侮蔑を含めた口調であった。言い放つや、すぐに眠そうにあくびを何度か繰り返している。

「ふん！！」

途端に彼は納得いかないように再度机を両手で大きく叩きつけた。生しい音とともに、さすがに堪らず机は真つ二つに割れた。ふー、ふーと彼、レイモンド・ラジアは鼻息を荒げている。依然として目は前にいる男を睨みつけたままだ。

「好きで来たんじゃない！ お前の目付け役を団長から頼まれたんだよ！！ 誰が好き好んでんどこ来るか。まだザチアにいる奴らと酒かつくらつた方がマシだ！ そもそもだ。メッカの野郎は気に食わねえんだよ。お前以上にな！」

「死ぬほどどうでもいいだろうが？ 俺にとってさ……こう見えても副団長だぞ俺は？ 目付役だが何だか知らないが、団長も変な心配しすぎなんだよなあ……部下は部下らしく黙って俺の言うこと聞いてろよ」

「上等じゃねえか……」

両者にらみ合ったまま動かない。いつでも襲い掛かれる態勢のレイモンド。依然として腕を後ろに組んだままのルクス。片方は顔を獣のような風貌に、片方は口に薄笑いを浮かべていた。

「おーおー。殺し合いか？ はっ！はっ！ 止めないけど、やめ
といたら？ 絶対レイモンド死ぬじゃん？ 私は後片付けはしない
からね。ルクスがやるんだよ」

どれほどの時が経っただろうか。この場にはまったく似合わない、
妙に伸び伸びとしたゆったりとした口調の女性が部屋の入口にたた
ずんでいた。長い黒髪をポニーテールで後ろにまとめ上げ、黒い外
套を羽織ったこの女性は、嬉しそうに双方を眺めている。

「それは勘弁だ。レイモンド、メツカに礼でも言ったらどうだ？」

「ふん！ うるせえ。俺が負けるかよ」

「はいはい。いいからいいから。見せたいものがあるんだ。殺し
合いは後でな。死んだら後悔しちゃうぞ」

この女性の名はメツカ・フランシス。黒色と知的好奇心を満たす
ことをこの上なく愛する、王立魔法研究学会を追われた破綻者であ
る。手を叩きながら、顎をくつと上へ動かした。

すると、音もなく二人の子供がメツカの横に現れた。

「おい……………まじかよ……………」

レイモンドは絶句した様子で二人の子供を凝視していた。先ほど
の興奮が嘘のようである。一見どこにでもいる少年と少女だが、現

れた瞬間この場の空気が間違いなく変わった。

（特にやばいのが右の奴だ……）

レイモンドは灰色の長い髪を胸まで伸ばした少年に、ある恐れを抱いていた。生気もなく、ぼんやりとこちらを眺めているこの少年の瞳は……人間ではない。ドラゴンの瞳を持つ人間。噂に聞く竜人の瞳だ。

（そんな奴が本当にいたのかよ……）

茫然とする彼を横目に、ルクスはつまらなそうにメツカに話しかけた。

「わざわざ団長命令で待たすから何かと思いきや……どうしたんだ？ これ」

「本当につまらないなあんたは……もつとうぎゃー！ って反応を期待してんだぞ。その点、レイモンドは素晴らしい。キスしてあげたいくらいだ。もちろん冗談だけど。お？ 本気にした？」

「するか！ 死んでもごめんだ。いかれ女！」

「私を褒めるなよ。こつちを褒める。９番と１０番だ。特にどうだこの９番は！ １０番もまあ竜人といえるんだが、別格だろう？ 両目が竜眼 ドラゴンアイ なんだぞ。見つけるのにわざわざ隣国までの奥地まで行ってきたんだ。調教に２、３匹失敗してさあ。つたく、頑丈が取り柄のくせに。まあ、いい死体が入ったと思えばいいかね。ほれほれ、見る見る！ この首輪！ メツカ様の自信作だ。首が閉まるなんてもんじゃない。私の意思で即電流が流れん

だぞ」

ぐいっと、もう片方。メツカが10番と名付けている少女の首輪をつかみあげた。亜麻色の髪をしたその少女は苦しそうにうめく。だが、そんな少女に一向に構う様子はなく、メツカはしゃべり続ける。

「前に買い取ったあの首輪はダメだダメ！ 欠陥も多いし、有効範囲があつからな。外すのはまあ無理だろうけど、たまにうまく作動しないことがあるから。囚人にはそれでもいいんだろうけどさ。その点この新開発！ あ、名前募集中だから、レイモンドはセンスなさそうだからなあ。ルクス、思いついたら教えてくれ。採用するかもしれないぞ」

余計なお世話だとつぶやくレイモンド。メツカが握るこの首輪は、この世界において禁忌とされる品。国が囚人に使う場合にのみ、認められている。奴隷に使っていた時代もあったが、この首輪を悪用するものが出たため、ある国では大規模な奴隷の反乱が起こったことがあるのだ。そのため、僻地での重労働を囚人に命じるときに例外としてこの首輪は使われることになった。国家間でも使用、流通が固く制限されている。むろん、個人がこのような首輪を、所持、開発などしたら、問答無用で処刑される。

「アホなこと言うな。てか、4匹目を作る気か？ さっさと手を離せよ」

「うーん、残念……おっと、そうだった。ほいっと」

何事もなかったように手を放す。少女はせき込みながら床に崩れ落ちた。その時、灰色の髪 of 少年がわずかな光をその瞳から覗かせ……

「その目、むかつくな」

ばちっ！ 一瞬の閃光と何かが焦げる音が部屋にこだました。意識を失い、少女に重なるように少年は倒れこんだ。

「あちゃゝ。またやつちゃった。ま、死ななきやいつか。そうそう、明日でしょ？ 皆殺しパーティは？ この子達使ってよ。10番はまあおまけだけど、9番はかなりいい線いくぞ。うわゝ、楽しくなってきた！」

踊りださんばかりにはしゃぐメツカ。どことなく不服そうなレイモンド。

「今からでもよかったのに……気絶させんなよな」

そう言いながら、相変わらず人を馬鹿にしたような笑みを浮かべているルクス。

（間違いなく明日は血の雨が見れるな）

心中はメツカに劣らず興奮気味だ。明日の惨劇を想像し、彼は面白そうに胸の内ではつぶやいた。

二十八話 竜人（後書き）

パソコンを使ってみました！やっぱり楽です！携帯で打ちたくなくなります。

初めて結構ダークっぽいシーンとキャラが登場しました。苦手な方はすみません。群狼関係はこんな感じですよ。

ではでは！読んでいただきありがとうございました！

二十九話 束の間く常識編く

さあ、昨日はすぐに寝たからまだ開いてもないんだけど、ロストマジック古代魔法
が乗った古書！ いよいよお披露目！ 後開帳だ！

空間魔法って何だろう。4次元ポケットでも使えるようになるのかな。それか、子供の頃欲しかったどこでもドアが、ノータイムで使えるようになったりしたりして。

まだ古書の表紙に手をかけただけだが、興奮が収まらず、心臓の鼓動が早くなっていくのを感じる。そんな自分を諫めつつ、ゆっくりと表紙をめくってみた。

「何？ この文字」

見たことのないミミズがひたすら横に、縦にくねくねしながら繋がった文字が広がっていた。

この世界の文字でも、ローマ字でもキリル文字でもましてや日本語でもない。

『どうしたんだい坊や？ 固まっちゃって。』ロストマジック古代魔法についての本なんだよ？ 文字だって人間にしたら古代文字で書いてあるに決まってるじゃないか。読めると思ってたのかい？ どうりで嬉しそう

な顔だと思ったよ。クフフ、もう少し頭を働かせないとダメだね。
あの野卑な蛮人になってしまうよ。クフフ、フフ、そんな坊やも可愛いけどね。もう少し、常識を、学び、たまえ。ね？ 坊や』

横から覗き込んでいたキリコが、饒舌に、雄弁に、ここぞとばかりに話始めた。どうやら知識はいいから常識を！ って言ったのを覚えていたらしい。一言一言、力を込めてゆっくり発音してきやがった！

こいつは……この白狐は！

戸惑いと驚きと怒りで声が出なかったので、無言でキリコの白い頬を両手で摘まむ。そして逆方向に力を込めて引っ張った！

『い、いひゃい。坊や、暴ひよくはいけひゃいよ』

無言で返す。全く……昨日の苦労は何だったんだ。頭を床にぶつけたの、実はかなり痛かったんだぞ。ああ、諸悪の根源がここに。

『いひゃいって。私がおひえるから。もともとそのつもつ！』

涙目で話すキリコ。手を離してやった。冷静になると、ちと可哀想だったか。それと教えるって聞こえたけど……何か嫌だな。摘まんだ頬は、少し赤くなっていた。特徴的な白い肌なので、結構はつきり分かる。

「キリコ、これ読めるの？」

一息ついて、冷静にと言いつつも聞かせながら聞いてみた。よし、大抵のことなら我慢しよう。

『違う違う。師匠……いや、カストールと一緒に……先生、うん、キリコ先生がいい。坊や、もう一度だ』

「じゃあねキリコ。長い付き合いだった」

去らばだキリコ。永遠に。僕には無理だったよ。我慢なんて……とても出来ない。

『短くないかい！ いや……違う。昨日初めて出会ったのに長いと坊やは言う！ この真意ははつまり……』

「気持ち的に長い」

『ラブか!』

「師匠なら知ってるかな。じゃ」

もう相手にしてられるか! ローラ姫なら知ってるかもな。帰ったら連絡を父上からお願いしてみよっかな。いや、どうしよ。大事になりそうだし。この古書って、やっぱ凄く貴重なものなのではないだろうか。

『ラブを込めて、さあ! キリコ先生って呼んでみたまえ』

何も聞こえない。古書を脇に抱えて、シルーレ、ついでにジジイと別れた村を目指す。方角は大体分かってるし、山を下るだけだ。ジジイには文句を言ってる! この魔獣との遭遇は、間違いなく僕をタフにした。ジジイ、恐れるに足らず!

『坊や。どうしたんだい? ああ、外で練習したいのかな。文字なら完璧さ。任せたまえ、キリコ先生にね。ほらほら、坊や。キ・リ・コ・先・生』

無視。ちなみに、一晚の付き合いだが、キリコについてわかったことがある。こいつは無視されるのが大嫌いなのだ。どうせ付いてくるけど、暫く無視しよう。というかもう疲れた。まだ朝だけど、やっぱり風呂に入らないとな……

「……………」

『おゝい。坊や。ちょっとあの、だんまりはズルくないかい？カストールだって師匠と呼ばれてるんだ。私にもそう呼んでくれたって……』

しよぼんと俯きながら、どんどん小声になっていくキリコ。最後は無言になり、下を向いたままだ。

あれ？ 何この感じ？ 僕が悪いのか。変な言葉に出来ない罪悪感が、じわじわと押し寄せてくる。謝らないといけないのか？ いや、演技？ どっち？ 混乱し始める僕。

すると、突然キリコの耳がピクピク動いた。忙しく動くその様子に、何かの音を拾っているのかと僕がいぶかしんでいると……

「クリーム！　ボクだよ。そこにいる？？」

シルーレの声が！　扉の向こう側にいるらしい。

「シルーレ！？　ちょっと待ってね」

嬉しくて声の上擦ったが、そんなことはどうでもいいや。キリコから目を離し、駆け足で扉を開けようとした。だが、すっと手を捕まれた。

キリコの目が紅く光る。表情は……眉が寄って、唇を少し尖らせていた。

二十九話 束の間〜常識編〜（後書き）

束の間シリーズ。まあ2つか3つを予想してます。キリコとクリム次第です。

ところどころ、ダークな部分もキャラも出てくるんで、苦手な方はすみません。

読んでいただき、ありがとうございます！

三十話 束の間／カオス編

キリコが怖いです。

普段お喋りなお調子者が、急に黙りこくってじーっとしてると、変な圧迫感というか居心地の悪さを感じるよね。今まさにそれだ。

『……………』

頼むから何か喋って欲しい。そして僕の手を放して欲しい。華奢な身体つきのはずなのに、がっしりと掴まれた僕の手は既に感覚がない。鎖で二重に縛られたかのような。しかも段々キツくなってるんだけど…

『…誰かな？』

おお、やっと喋ってくれた。ただうつすら寒気がするのは気のせいだと思いたい。

「えっと、僕の友達。シルーレって言って」

『クフフ。それにしてはやけに嬉しそうだったねえ。いや、文句を

言うつもりはないんだよ私は。私の心は海より広大で太陽の如く暖かいからね。うん。度量の広いキリコさんと、あだ名として呼んでもらってもいいと思ってるくらいさ」

「じゃあ度量の広いキリコさん。手を放してくれ」

『それは駄目。まあ坊やにも友達はあるだろう。それは構わないんだが、なんと言つか…そう、この気持ち！一言で言い尽くすのは非常に難しい。空前絶後であり天上天下さ。だがあえて！あえて言うとするど！』

僕の要求は一蹴されました…こいつの心は海より絶対狭いんだけど、ちっちゃい水溜まりといい勝負じゃないだろうか。

「はあ…すると？」ため息をはきながら一応聞いてみた。

するとそっぽを向き、ボソツと『氣にくわない』とキリコは呟いた。

「言い尽くしてるじゃないか！僕にどうしろって言っただ！度量の広さはどこいった？」

『もう少しでキリコ先生って坊やが呼んでくれるところだったのに…しかも坊やめ、嬉しそーに…そんなにシルーレとかいう女がいい

のかい？私とは遊びだったんだね！』

そしてキリコは、僕の肩を両手で掴んで揺らしてきた。うわゝ理不尽。何で僕は責められてるんだろうか。八つ当たりされてるだけのようない気がする。

「おいキリコ…あんま激しく…うわ、気持ち悪くなってきた…」

ドンドン！強めにドアがノックされた。シルーレもさすがに不審に思ったのだろう。返事をしたのに大分待たせてしまっている。怒ってなければいいのだが。

「クリーム！…開けるよ！」

勢いよくドアが開かれた。さて、とりあえずキリコが肩を揺らすのを止めてくれたのは幸いだ。だが脳がまだ揺れているし、視界もふらつく。結果、僕は自然とキリコに正面から支えてもらう形になってしまった。いや、コイツはわざとそうしたらしい。僕をニヤニヤしながら抱き締めてきた。ぬわ、顔に胸を押し付けてくる。身長差を考えたら仕方ないけど、男としてどうなんだ？これは恥ずかしい。

「……………クリーム……………誰それ？何してるの？」

微笑しながらシルーレが僕に声をかけた。無論殺気しか感じない。

ヤバい！説明できない。誰か助けてくれ！

『クフフ。見て分らないのかい。愛し合ってるんだ。フフ、邪魔しちゃダメじゃないか。エルフのお嬢さん』

頼むからお前は喋るな！文句を言おうにも、ここぞとばかりに胸を押つけて僕の口を塞いできた。うめき声しかあげられない。

シルーレの顔から微笑は一瞬で消えた。無表情に……めちゃくちゃ怖いんだけど！

「クリームを放してくれない？カストールの知り合いの魔獣さんだよね？そしたら苦しまないように一瞬で楽にしてあげるから」

『クフフ。野蛮だね。カストールのせいかな。あれが師匠だなんてお嬢さんも可哀想に。さて、もてなしをしてあげたいところだが、あいにく今は凄い忙しいのでね。んっ…坊や。大人しくしてくれ。時間はたっぷりあるから焦らさなくていいよ。クフ。というわけなんだお嬢さん。帰ってくれないかな？』

「……」

『……』

今にもレイピアを抜きかねないシルーレに対して悠然と構えるキリコ。視線はぶつかったままだ。

てかい加減僕を放せよキリコ！絶対邪魔だろ！シルーレ！僕ごと突き刺すとかないよね？ありそうで怖いんですけど。

もう…耐えられない！

「ぶはっ…シルーレ落ち着いて！誤解なんだこれはキリコが無理やり」

「後でゆっくり聞くから。クリームは黙ってて」

『む、坊やから私の胸に飛び込んできたんじゃないか。全く、照れ屋なんだから』

「クリーム……」

何その信じてたのに……みたいな表情は！？一体僕はどつすれば！？

三十話 束の間／カオス編（後書き）

長らく投稿せずすみません。忙しくて…感想頂きありがとうございます！誤字はあとで直しますのでご勘弁を。携帯が壊れたのは痛すぎます…

ではでは。駄文ですが読んで頂きありがとうございました！

三十一話 束の間／カオス2編

「馬鹿ども！」

おお、何だか懐かしい。ジジイの一喝でキリコ屋敷は本当に揺れた。パラパラと埃がどこから舞い上がり頭上に落ちてきた。

「師匠！」当然喜ぶ僕。ジジイの登場に感謝したのは初めてかもしれない。

「カストール！」気まずそうなシルーレ。ジジイの存在を忘れていたらしい。顔をひきつらせたまま固まっている。

『うげ…』正直な感想を漏らしたのは、まあキリコでした。その拍子に僕をやっと放してくれた。やっと自由だ。

「いきなり走り出したかと思ったら…何だっつんだ。おいキリコ。ババアが若いの苛めんな。坊主も嫌がつてるだろうが」

とジジイは髭を弄くりながらキリコに説教を始めた。いやに貫禄がある。そんなジジイに対し、キリコは鋭い目つきで答えた。

『はあ？おいカストール。誰だねその「ババア」とは。しかも坊やたちを「苛め」ていと言ったね。相変わらず足りない脳みそだ。人間は学習するものと聞いたんだがね。変わったのは髪の色だけかな』

「ふん。何百年生きとる化け狐はどう考えてもババアだろうが」

『二度目だぞカストール…』キリコの口から白い息が出始めた。いや…あれは炎か？強い熱気を感じる。

「わしは正直なもんでな。すまんすまん」と言いながらガツハツハと笑うジジイに悪びれた様子はない。むしろ挑発している。多分無意識に。団体行動出来ないタイプだなと、今更だが思った。

『クフフ。もう無理だ。殺す。殺そう。今すぐに。坊やの師匠は私だけで充分だ…』

「…はっ。おい化け狐。誰が誰の師匠だと？」

ジジイが笑うのをやめた。すると一気に場の雰囲気为重くなり、冷たいものに変化する。

何かヤバくね？これ。止めなくちゃ…一人じゃ無理かもだけど、シルーレとなら大丈夫だろう。ジジイはシルーレに甘いからな。よし！

「シルーレ！師匠を連れて一旦外へ。僕はキリコをなんとかなだめるから！」

「…ボクも加勢するよカストール」

「はい？」

シルーレは既にレイピアを抜刀していた。今日のシルーレはどうしたんだ？いやに好戦的だ。

「お…落ち着こうよシルーレ」

「クリーム…魔獣さんのこと、キリコって呼ぶんだね。親しそう。ボク、昨日はすつごく心配したのに…カストールを説得して、朝早くに着くよう頑張ったのに…会えるの楽しみだったのに。クリームは昨日…お楽しみだったのかな？」話しかけながら僕の方へ歩いてくる。

思わず後ずさる。おいおい。昨日に劣らず厄日の予感。しかも発想が大人なんだけど！そこは年相応でお願いしたかった。

「昨日は…」

いや待て…何を言ってもキリコが後から変なことを付け加える可能性が高い。あいつは人（僕）の不幸を加速させる天才だ。

下手なことは言えない！

「昨日は？」促すシルーレ。

ん〜ピンチだ。目を合わせられず、視線を右上にずらすとつって…え？まさか…

光ちゃんがいる！

右手を顔の横に置き よ と僕に挨拶。

何しに？ 様子見に

どうやって？ 飛んで

何故そこに？ なんとなく

まあそこは長年の付き合いだ。一瞬のアイコンタクトとボディランゲージの応酬で一応理解した。ぶっちゃけ勘だけ。

とにかく、頼りになるかもしれないスケツトだ！

助けてくれ 何で？

困ってる それが？

助けて欲しい ×

首をかしげてやれやれのポーズの後に両手で×ときた…笑ってやがるよあの幽霊……

『死ね！カストール！』

「うるせえぞ化け狐！」

「クリーム？」

…もうどうにでもなれ！

「昨日は『私と一緒に寝』た！」

口を開けたまま固まる僕。キリコは無駄に器用に…見事に被せたも

んだ…この状況で。

これを合図に1分後。キリコ屋敷は脆くも崩壊した。

三十二話 戦闘準備

ヨゼさんはいい人だ。屋敷崩壊の音を聞きつけ即座に駆けつけてくれた。そのままのびてた僕を自分の屋敷まで運んでくれたのもヨゼさんらしい。そのことでひと悶着あったらしいけど、どうせキリコが何かごねたんだろう。

『でね坊や。空間魔法っていうのは…使い方によつては魔戦技に入るのかな。とにかく、空間に干渉する手段を手に入れるということにつきるんだ。まあ、これは私の持論だし、見たことはないがね。ある意味最強の魔法だと思わないかい？一瞬で空間を瞬間移動！ほら、私に教えを乞いたくなってきただろう？』

こいつは…何て言うか…タフだよな。僕は今、ヨゼさん宅にお邪魔している。親切にもベッドを貸してもらっていた。特に怪我をしたわけではないが、念のため。シルーレが右隣で申し訳なさそうに僕を見つめている。

キリコはこの通り。何を喋り出すかと思えば…他に言うことがあると思うんだが。隣にいるシルーレの態度に感じることは微塵もないようだ。キリコ先生とそんなに呼ばれたいのだろうか。

「でねの使い方間違ってるぞキリコ…それより、明日は赤月の群狼って相手がお前を狙ってくるんだろ？大丈夫なの？」

ヨゼさんに一通り説明してもらったが、これには驚いた。あんな馬鹿な争いに時間を費やしてしまった自分が恨めしい。

すると、キリコは胸を張り高らかに言った。

『クフフ。私が負けるとでもいうのかな？それに、こういう時は、坊やが守ってやる！と決意を固めるものではないかい』

不安な様子はまるでない。そして何故か、キリコは目を細めて僕の頬っぺたをつねってきた。

「ふう…キリコは分かかってないよ」

シルーレはその手をバシッと弾き、はつきりと言った。

「いい？赤月の群狼っていうのは、未だに正体が掴めない世界最悪の盗賊の一つなんだ。闇ギルドの中枢だとも言われてて、各国が血眼で捕まえようとしてる組織なんだよ。目的も組織のトップも不明の残忍な狼集団。皆殺しの目にあった村は数えきれないんだ」

真剣な表情で重々しくも淡々と話すシルーレ。その表情は暗い影を宿しているように見えた。

『やけに詳しいね。お嬢さんは赤月の群狼とやらの私怨があるのかな？』

キリコはそんなシルーレを覗き込むように観察していた。その口元は興味深そうにニヤけている。

「あなたには関係ないよ」

つんと拗ねるシルーレ。間違はなく赤月の群狼と因縁がありそうだが、気が昂ってるように見える。明日にはもう襲ってくるんだ。そこまでの相手だとすると、果たして僕は力になれるだろうか…

「krimは明日は村人と一緒に避難だつて。カストールが言ってたよ。ボクなら大丈夫だから、心配しないでね！」

「ははっ。シルーレもでしょ？言っておくけど僕も一緒に行くよ」

「ちよっkrim！何言ってるの？駄目だよ。絶対駄目！」

さらに抗議の声をあげようとするシルーレの頬を、無造作に両手で左右に引っ張った。シルーレが立ち向かうなら、僕が逃げるわけにはいかない。初めての友達なんだ。絶対失いたくない。

「ふひみゆ（クリム）？」

「うん。シルーレは僕が守る。光ちゃんもいるんだ。足手まといにはならないから」

「……」

みるみる赤面するシルーレ。顔の熱が直に僕の手伝わってくる。こんな熱いこと言う人じゃなかったんだけど。人間変わるもんだ。前世の僕なら死んでもこんな……ってあれ？死んだら言えるもんだね。

『ずるいぞ坊や！』

「いて！」

すかさずキリコが脳天にチョップを入れてきた。地味に痛いんだけど。結構本気で打ったなこのやろー。

『それは私に言って欲しい。あと光ちゃんって誰かな？浮気を許すほど私は寛容ではないので注意したまえ』

「いや、精霊のことだし。浮気の意味も分からない。とりあえず、あの古書を貸して。少しでも強くなる可能性があるなら、それにかけてみたい。頼むよ、キリコ先生」

『ぐ……その顔は反則だ……しかも、キ、キリコ先生と……任せたまえ坊や！今すぐに持ってくるから待っていたまえすぐに始めよう！』

即座に立ち上がってドアを蹴り飛ばして出ていった。……超嬉しそうだったな……変なスイッチが入ったようだ。相変わらずよく分からない。い。

さて、もう時間も残り少ない。ジジイも説得しなくちゃだろうな……これが最悪の関門だな。ま、意地の張り合いだったら負けないさ。何とかしてみせる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5873w/>

いつのまにやら伯爵様～マイペースな転生物語～

2011年11月30日23時46分発行